
SECOND LOVE

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SECOND LOVE

【Nコード】

N3775I

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

愛人と別れ、傷心の愛。そんな時、愛の前に一人の高校生が現れた。しかし彼は・・・

（「18 years」から派生したお話ですが、中編小説としてお楽しみいただけます）

第1話

ルルルルル

無意識のうちに手がベッドから出て、携帯のアラームを止める。
そして、無意識のうちにベッドから出て、洗面所に向かう。

顔を洗ってさっぱりしたところで、ようやく気がついた。

・・・今日、有給だった・・・

はあ。

でも、もう顔も洗って目が覚めてしまった。
もう一度寝る気にはなれない。

どうしよう、まだ7時前だ。

そういえば、今日は大切なプレゼンの日だ。
今日のプレゼンのリーダーは私の同期の小山という男性社員で、私はサブメンバー。

プレゼン自体には参加しない。
だから、今日は久々に有給を取ったのに・・・
アラームを消し忘れるなんて。

でも、小山君、大丈夫かな？
うちの会社は化粧品メーカーで、少数精鋭型なので特別仕事ができない人、というのはいない。
だけどやっぱり、優劣はあるもので・・・

一抹の不安がよぎる。

やっぱり午前中だけでも出社して、プレゼンの場に居合わせよう。

そう決めて、いつも通り出社の準備をする。

白いカッターシャツにカーキのジャケット。

スカートは濃いグレーのタイトなものにした。
ちよつと地味かな？

でもプレゼンだし、軽い格好ではいけない。

化粧もバッチリ決める。

昔から化粧は好きだったけど、社会人になってからは
ますます気合を入れるようになった。

そう、あの人のために・・・

ブンブンと首を振る。

今はそんなことを考えている場合じゃない。

髪を巻いて、ストッキングを履き玄関に向かう。

朝ごはんは途中のコンビニでゼリーでも買おう。

「・・・ですから、アンケートの結果、H社の類似製品に比べまして弊社の製品はターゲットにしている、

30代から40代の女性に指示されていることが分かります」

「そのアンケートはどのようにして行われたのですか？信憑性はありますか？」

「このアンケートは・・・ええと・・・」

彼の目が泳ぐ。

・・・仕方ない。

私はその場で口を開く。

「ただいまお見せいたしましたアンケートは、インターネットのHP上で行いました。

ですから、お客様も遠慮なくご意見を書かれていますと思います。

また、HPを見るためには無料ではありますが会員登録する必要があります。

会員になる方法は弊社のなんらかの商品を購入した方にのみご連絡してありますので、

冷やかしなどはないと思っていただいて結構です」

質問者は「なるほど」と納得してくれたようだ。

小山君は私をちらっと見てバツの悪そうな顔をした。

きてよかった・・・これくらい、自分で調べといてよね。

「間宮さん！ありがとうー！さっきは助かったよー」

「どういたしまして。仕事、取れるといいわね」

「うん・・・あ、お礼したいからさ、お昼一緒にどう？」ご馳走するよ」

小山君のお誘いは丁重にお断りして、会社をでる。

プレゼンさえ終われば、今日はもう会社に用はない。

さあ、今から何をしよう・・・

以前なら、あいた時間は必ずと言っていいほど彼に会っていた。彼もできるだけ私に会えるよう、仕事を調整してくれた。

その彼と別れて1ヶ月。

あと1週間もすればもう2月だ。

ポツポツと足元に雨粒が落ちる。

「あれ・・・？天気予報では晴れだったのに・・・」

傘は持っていない。

仕方なく、雨宿りがてら駅までの道の途中にあるデパートに入る。

明るい店内に煌びやかなアクセサリーが並ぶ。

でも欲しいものは何もない。

ブラブラと20分ほど時間を潰したけど雨は上がる気配が無い。

それどころか強くなる一方だ。

ここで傘を買っていいのかな？

そう思って、館内案内を見たけど、婦人用の傘売り場は7階だった。そこまで行くのも面倒臭い。

私は諦めて、駅まで走ることにした。

デパートを出て5分くらい経った頃だろうか、

私は後ろをつけてくる足音に気がついた。

初めは私の勘違いかとも思ってたけど、
平日の昼間で、人通りも少ない。

私が歩調を速めれば、その足音も早くなるし、
遅くすると、その足音も遅くなる。

・・・ナンパかな？

だったら早く声をかけてほしい。

そうすれば「結構です」とバツサリ断れるのに。

いつもだったら、声をかけてくるまで放っておくか、
完全に無視をして駅まで急ぐかのどちらかだけど、
今日の私は虫の居所があまりよくなかった。

せつかくの休みなのに、入社してしまったし、
雨だし、傘もないし、

・・・なんだか彼のことも思い出してしまったし。

それで、思わず足を止めてしまった。
足を止めて振り向いてしまった。

「ついてこないでください！」
そう言おうと口を開けたけど、そこにいた予想外の人物に言葉が出
てこなかった。

知っている顔ではない。
でも、その男の格好に驚いた。

「男」というのもおかしいかもしれない。
グレーのブレザーを着ていたから。

そこにいたのは間違いなく高校生だった。

第2話

高校生に知り合いなんていたかな？

身長は175もないくらい。

170近くある私と、あまり大差ない。
なかなか可愛らしい顔をしている。

記憶をたどるが、思い当たらない。

もちろん、高校生にナンパされないと限らない。
自慢ではないけど、私は結構よくナンパされる。

でも、この高校生はナンパするために私の後をつけていた訳ではなさそうだ。
なぜなら。

その瞳はお世辞にも好意的とはいいかねた。
はつきり言つと、憎しみを湛えていた。

ただどこで食ってかかるのはあまりにも大人気ない。
なんと言つても相手は高校生だ。

私はできるだけ優しく話しかけた。

「君、誰？私に何か用かな？」

でも、その高校生は態度を変えることなく、
私を睨みつけたまま言った。

「俺は廣野組のモンだ」

ドキッとした。

それと同時に、この子が誰なのか、そしてどうして私をこんなにも睨みつけるのかがわかった。

私は一ヶ月前まで、ヤクザの組長の廣野統矢の愛人だった。組長と言っても統矢は若い。まだ29歳だ。

統矢は組のことはあまり話してくれなかったけど、組にいる高校生のことだけは、たまに話してくれた。

その口ぶりから、統矢がその子のことをまるで弟のようにかわいがっているのが伺えた。

そして、その子も統矢を兄のように慕っていて、また、統矢の奥さんのことも姉のように慕っているようだった。

確か・・・統矢はその子のことを「コータ」と呼んでいた。

「コータ」からすれば、私は決して気持ちのいい存在ではなかったはずだ。

私は目の前の高校生を見つめた。

おそらく、この子がその「コータ」なのだろう。

「何？統矢ならもう、奥さんに返したでしょ？あなたに睨まれる筋合いはないわ」

「返した？ネエちゃんが出て行ってから返してもらっても意味ねーよ！」

「・・・え？」

出て行った？

誰が？

「ネエちゃんて・・・統矢の奥さんのこと？ユウさん？出て行ったの？」

「そうだよ」

「いつ？」

「去年のクリスマスの朝に子供と出て行っちゃったよ！」

コータは吐き捨てるように言った。

統矢と私が別れたのも、去年のクリスマスだ。

イブの夜からずっと一緒にいて、クリスマスの夜に別れた。

「統矢はユウさんがクリスマスに出て行っちゃって知ってたの？」

「前の日に聞いてるはずだ」

コータは、なんでそんなこと聞くんか、というような表情をしている。

だって・・・

じゃあ、統矢は奥さんが出て行くと知っていたのに、私と別れたの？それって、奥さんがいるとかいないとか関係なく、私とは続けるつもりはなかったの？

私には、恋愛感情は本当に全くなかったの・・・？

呆然とする私をみて、コータも全てを悟ったのか、

「あんたもかわいそーな奴だな」

と皮肉るように言って去っていった。

私は雨が降っているのも忘れ、しばらくその場に立ち尽くした。

——寒い！

家に帰ってきて、ようやく自分が寒いことに気がついた。

とりあえず、お風呂に入ろう。

風邪をひいてしまう。

コータの話はショックだったけど、

とりあえず今はお風呂だ。

熱いシャワーを浴びて、温かいコーヒーを飲むと、少し気分が落ち着いてきた。

統矢・・・

統矢は奥さんをとて愛していた。

私はそれを承知で彼とつきあっていた。

統矢が私に恋愛感情などないことは、初めからわかっていた。

だけど、こうやってその事実を目の当たりにさせられると、やっぱりショックだ。

統矢と別れた後、私はこの世の終わりかと思うほど泣いた。
でも、一ヶ月たって、ようやく立ち直ってきたのに・・・

ドレッサーの上においてある、ジュエリーケースを開けた。中にはどれも決して安くはない、アクセサリーがたくさん入っている。その中でもひとときわ輝くダイヤのネックレスを取り出した。

クリスマスに、統矢からもらった最後のプレゼントだ。

でも、嬉しくなかった。

本当に欲しかったのはこんなものではなかった。

私は統矢に1万円もしない、おもちゃみたいな指輪をねだったのだ。最後にどうしても統矢から指輪をもらいたかった。

でも統矢は「指輪なんてユウにもあげたことがない」と言って買ってくれなかった。

その代わりに、このネックレスを買ってくれた。

一体いくらするのかも分からない。

少なくとも私のお給料では一生かかっても買えないだろう。

私の実家は代々続く資産家で、お金なら有り余るほどある。

だけどそんな家のお爺ちゃんでもお父さんでも、簡単に買えるものではない。

それを統矢はまるで子供にお菓子を買うように、ポンと買ってくれた。

あんなにねだった指輪は絶対に買ってくれなかったのに……。

やっぱり私はユウさんにはかなわない、そう思った。

それなのに……どうしてもユウさんは出て行ったんだろう。

私はようやく、ユウさんと子供のことに考えが至った。

確かユウさんはまだ二十歳だ。

小さな子供と二人でこれからどうするつもりなんだろう。

ううん、心配は要らない。

統矢と結婚するくらいの人だ。

きつと私みたいに実家はお金持ちで、生活には困らないだろう。

でも、気になる。

どうして廣野家から出て行ったのか？これからどうするのか？

どうやったら分かるだろう・・・

そうだ。

あの子。

あのコータという子なら、何か知ってるに違いない。

そう思うと居ても立ってもいられなくなった。

明日、あのコータに会いに行ってみよう。

私はベッドに倒れこんだ。

そして・・・

久しぶりに昔の夢を見た。

第3話

鏡の前で、くるっと一回まわる。
胸のすぐ下で切り替えのある白いワンピースのすそがフワッと広がる。

うん、いい感じ。

でも、もう中学1年生なんだから、もう少し大人っぽい服でもよかったかな？

お化粧は、マスカラと・・・口紅はちょっと派手になっちゃうからプルンとなるグロスにしよう。

髪の毛は、あんまりキチツとするとピアノの発表会みたいだから、軽くアップにして、後ろは流す。

よし、完璧！

鏡の中に向かってニコツと微笑む。

我ながらかわいいと思う。

生まれつき背が高く、手足も長いから、高校生は無理でも中学3年生くらいで通りそうだ。

でも・・・

こんなにお洒落しても別に見せたい人がいるわけじゃない。
そう思ったとたん、鏡の中の表情が曇る。

今日は10歳になった頃からお爺ちゃんに毎年連れて行かれているクリスマスパーティーだ。
クリスマスパーティーなんて言うと、いかにも華やかそうだけど、

その実ただの、政治家達の見栄の張り合いの場。

13歳の私には退屈すぎる。

それでもお爺ちゃんが私を連れて行くのは、自慢の孫を見せびらかせたいのと・・・

私のお嬢さん候補探した。

あんな中年のオジサンばかりのパーティでどうやって私のお嬢さんを探すというんだろう。

どんなに若い人でも30代だ。

それに、あんな踏ん返り返った人たちは私のタイプじゃない。

クラスの男子も子供っぽくて話にならないけど、あのオジサン連中よりはマシだ。

「愛。支度はできたか？」

「うん」

「おお、かわいいじゃないか。そうか、愛ももう中学生だからな」

お爺ちゃんは嬉しそうに笑う。

私もこういう風に言われると悪い気はしない。

うちは間宮財閥という資産家で、お爺ちゃんが今そのトップに立っている。

ワンマンだし、突拍子もないことを言い出すから「困ったお爺ちゃん」でもあるけど、

私のことは眼に入れても痛くないくらいかわいがってくれるし、贅沢をさせてくれる。

大好きなお爺ちゃんだ。

「行こうか」

「はい」

私はお爺ちゃんの腕に手を絡ませて、リムジンに乗り込んだ。

煌くシャンデリアに美しく着飾った人々、

テーブルにたくさん並べられたお料理とお酒。

まるでシンデレラの世界だ。

でも・・・やっぱり退屈。

私は手近な壁に持たれ、赤ワインを舐めていた。

今日だけはクリスマスパーティーということで、お爺ちゃんからお許しを貰って飲んでみたけど、

何これ？マズすぎ。

でも、ワイングラスを持っているだけで大人の気分が味わえるから我慢してちよつとずつ飲む。

当のお爺ちゃんは挨拶まわりで忙しそうだ。

もつとも、挨拶される方が断然多いけど。

こんなパーティー、お料理を食べるくらいしか楽しみがないけど、最近体重も気になるし、思いつきり食べる訳にもいかない。

ああ、息が詰まりそう・・・

そうだ、テラスに出てみよう。

さすがに12月だけあって寒いので、

テラスに出ようと言う人はいないだろう。

特に、このパーティに参加している歳の人は。

テラスを独り占めできると思って、扉を開けて・・・
驚いた。

タキシード姿の先客がいたのだ。

こんな寒いのに、変わった人もいるんだなあ。

その人はテラスの手すりに腰を軽くかけて煙草を吸っていた。
随分と若い。せいぜい二十歳くらいだろう。

私はその人から目が離せなくなった。

その人は、このパーティでは随分変わった存在に思えた。
若いというのもあるけど、

なんて言うか・・・雰囲気が他の人と全然違う。

堂々としてるけど踏ん返り返ってる訳でもない。

ちょっと斜に構えてる風ではあるけど、嫌味な感じもない。

それに・・・

かっこいい。

私はその場に立ち尽くし、じっとその人を見つめた。

すると突然、その人が私の方に振り返り、驚いた顔をした。

「この寒いのに、物好きもいるもんだな」

「・・・そちらこそ」

「俺は一応長袖だからな。そっちは見るからに寒そうだけど？」

そういえば、私半そでのワンピース着てるんだった。

そう気がついた瞬間、私は盛大にクシャミをした。

「はい」

その人は私にタキシードの上着を貸してくれた。

「・・・ありがとう」

「ごじます」の言葉を飲み込んだ。

私は普段から、「目上や年上の人には丁寧な言葉遣いをする事」と学校で厳しく言われている。

お爺ちゃんもお父さんも、「間宮家の一人娘だからと言って、横柄な態度は取るんじゃない」と言っている。

だから、こんな年上の人にこんな言葉遣い、普段なら絶対にしないけど、

この人には子供って思われなくなかった。

対等に思われたかった。

だから頑張つてわざとタメ語で話そうと思ったのだ。

だけど、その人は私のそんな気持ちには全く気づかず、ズケズケと

酷いことを言った。

「何それ？ワイン？ガキがそんなもん飲むなよ」

「・・・ガキじゃないわ」

「ガキだろ」

「中学１年生よ。１３歳よ」

「立派なガキじゃねーか」

「もう大人よ」

ははは、とその人は笑った。

「そうかそうか、これは失礼」

「なによ、あなただってあまり大人には見えないけど？」

「１９歳だから、あんたよりは遥かに大人だと思うけど？」

「・・・６つ、しか、かわらないじゃない」

本当は、そんなに違うのかとショックだった。

これじゃガキだと言われても仕方ない。

「７つだ。俺、３月で二十歳だから」

７つ・・・。

「あと、私、ガキでもなければ『あんた』でもないわ。愛って言うの。間宮愛。あなたは？」

「俺は廣野統矢」

廣野？そんな政治家いたっけ？聞いたことがない。
もちろんこの人自身が政治家な訳はないけど・・・

私は失礼を承知で、わざと高飛車な態度を取った。

「じゃあ、統矢って呼んでいい？私は愛でいいわ」

うわー、恥ずかしい・・・こんな年上の人に・・・

でも、「統矢」はそんなことは気にならないようで、「いいよ」と笑って言った。

第4話

「初めて来たけど、なんだこのくだんねーパーティは？」

統矢が心底嫌そうに言う。

「うん。つまらないわよね」

私もそう言つて、ワインを飲む。

・・・やっぱりマズイ。

でも、頑張つて飲む。

ちよつとは「大人だな」つて思ってくれるかな？

「・・・よくワインなんか飲めるな」

「え？」

「俺、ワイン飲めない。不味い」

「・・・統矢こそガキね」

ジロつと軽く睨まれる。

でも、やっぱりかっこいい。

ドキドキする。

「まあ、ガキつて言われても仕方ないか。せつかく1年間頑張つてきた禁煙も、

このパーティのつまんなさに負けてこのザマだし」

そう言つて、ふーつと煙を吐く。

「さっき、19歳つて言わなかった？一体いつから煙草吸ってるの

？」

「・・・いつだっけ？ 忘れた。物心ついた頃かな？」

「何それ」

面白い人だな。

それから私たちはそのままテラスで、くだらないことばかり話した。でも統矢の話はとても面白かった。

私はずっとお腹をかかえて笑っていた。

お酒も物心ついた頃から飲んでて、アルコールとソフトドリンクの違いを知らずに育ち、

中学生の時に先生が「二十歳になるまでアルコールは飲んじゃいけません」と言うのに対し、

「コーラはアルコールですか？」と質問して赤っ恥をかいたとか、空手をしているのをいいことに喧嘩しまくってたら、お母さんに簡単にぶっ飛ばされたとか、

大学の講義中に寝てたら椅子から転げ落ちて、更にそのまま教授のいる壇上まで階段を落ちて、

しかもその教授が女でスカートの中を見てしまつて痴漢扱いされたとか・・・

結構間抜けというか、かわいい人だな、と思った。

そして、そんな楽しい時間はあつと言う間に過ぎて行った。

「ご機嫌だな、愛」

「うん」

帰りの車の中、私の機嫌は最高によかった。

でも、統矢とは次いつ会えるんだろう・・・
さすがに「どこに住んでるの？」とは聞けなかった。
なんかストーカーみたいに思われたら嫌だし。

「ねえ、お爺ちゃん。廣野さんって知ってる？」

「廣野？知らない」

「20歳くらいの男の人」

「・・・ああ、あの廣野のことか」

「知ってるの？」

「廣野は関東を牛耳るヤクザだ。廣野大吾がその組長で、愛が言っている若いのは跡取りだろう」

「え？ヤクザ？」

「そうだ。愛、あんな奴らと関係を持つなよ。ロクなことにならない」
「・・・」

ヤクザ。

どつりで雰囲気が他の人たちと違うわけだ。

でも、私には統矢がヤクザなのか政治家なのかなんてどうでもよかった。

統矢は統矢だ。

「廣野さんは毎年あのパーティに来てるの？」

「ああ。ヤクザと言っても政財界まで影響を及ぼす力を持ってるかな」

「ふーん」

私はわざと興味がない風を装った。

でも心は弾んでいた。

じゃあ、来年のクリスマスパーティーでも会えるんだ！

一年間も会えないのは嫌だけど、さすがにヤクザのお家に「こんにちは」とは行けない。

一年に一回会える・・・なんか織姫と彦星みたいでロマンチックじゃない！

よし！

見てなさいよ、統矢！

来年のクリスマスパーティーの時にはビックリするくらい大人になってやるんだから！

それからの1年間、私は全精力を次のクリスマスパーティーのために注いだ。

エステティシャンに家に来てもらって2週間に一回エステをしたり、馬鹿な女だと思われなくなかったから勉強も頑張った。

クリスマスの3ヶ月前には、デザイナーの人に来てもらって、パーティー用のドレスを特注で作ってもらった。

できるだけ大人っぽく・・・でも背伸びはしすぎないように。

前日は、エステはもちろん、美容院で髪も整えてもらい、ネイルもした。

そしてパーティー当日。

1年前と同じように、鏡の前で全身をチェックしていた。薄いピンクのワンピース。

ピンクなんて子供っぽいと思ってたけど、さすがはプロの仕事だ。

少し大きく開いた胸元と、タイト目のデザインの胸元でお陰で可愛らしさと大人っぽさが見事に共存している。

胸元には小ぶりだけど本物のダイヤのネックレス。ママにおねだりして買ってもらった。

髪も今日だけ少し染めて、夜会巻きにしてある。

去年なんかとは比べ物にならないほど大人っぽい。

そして・・・何より去年と違うのは鏡の中の私の表情だ。

自分でも分かるくらいはつきりと「恋する乙女」と書いてあるように恥ずかしい。

でも！

でもこれで少しは統矢に近づけるかもしれない！

私は高鳴る胸を抑えて、パーティー会場へと向かった。

第5話

パーティ開始5分前。

私はみつともないくらい会場内をキョロキョロと見回した。

・・・いない。

どうして？

去年のお爺ちゃんの言葉を思い出す。

廣野大吾と言う人が組長で、統矢は跡取り。

ということは、このパーティには組長がくれば事足りているということじゃないか。

私と一緒に、統矢は絶対参加しなくてはいけないという訳じゃない。

それに、統矢は去年、

「初めて来たけど、なんだこのくだんねーパーティは？」
と言っていた。

・・・もしかしたら今年はもう来ないかもしれない・・・

そう思ったとたん、一気に気持ちが沈んだ。

この1年、何のために頑張ったんだろう？

もう統矢とは二度と会えないのかな？

扉をジッと見つめた。

お願い、開いて。

そして、入ってきて、統矢。

でもそんなこと、
ドラマみたいにパツと扉が開いて待ち人が現れるなんてこと、ある
はずがない。
あるはずが・・・

そう思つて諦めようとした、その時。

まさに扉がパツと開いて、統矢と統矢のお父さんと思われる人が会場に入ってきた。

嘘・・・

夢見たい！！！！

実際、統矢はそつと入ってきて、壁伝いに歩いて会場の一番隅に行つただけど、

私にはスポットライトでも当たっているように見えた。

それから私はその場に立ち尽くし、

統矢がお父さんと一緒に、簡単に挨拶まわりをしているのを目で追つた。

よかった・・・来てくれた。

それだけで、もう涙がでそうだった。

そして、去年のように統矢がテラスに出て行くのを見て、私は慌てて後を追いかけた。

ダメダメ、焦っちゃ。

せっかく大人っぽく、つて思つて頑張ってきたのに、
ここでいかにも待つてましたとばかりに追いかけたりしちゃあ・・・
落ち着いて、落ち着いて・・・

だけど、私のそんなお芝居は、統矢にあっさりと見破られてしまった。

「・・・愛？久しぶりだな、どうした、そんな慌てて」

「・・・慌ててないわ」

「そうか？走ってきたみたいだぞ？」

ぐつと詰まる。

走ってなんかないわよ！・・・まあ、気持ちだけは100メートル走並に走ってたけど。

「お久しぶりね」

「ああ。びつくりした。大人っぽくなったな、誰かと思ったよ」

もう、その言葉を聞いたときの嬉しさと言ったら・・・！！！！！！
頑張ってよかった・・・本当によかった・・・

そつと統矢に近づく。

なんか、少し痩せたのかな？大人っぽくなった気がする。

・・・嫌だな、これ以上差をつけないでよ。
追いつけなくなるじゃない。

でもそんな大人っぽくなった統矢に私はポーツと見とれた。

「どうした？」

「・・・ねえ、ちょっとは綺麗になった？私」

「ああ。綺麗になったと思うよ。てゆーか、去年から愛は綺麗だと思っけど？」

嬉しすぎる・・・

あまりの嬉しさに、私は思わず飛んでもないことを言い出した。

「じゃあ、大人になったら統矢のお嫁さんにして」

「はあ？あははは、いいよ。考えとくよ」

うわ。

物凄く適當。

全然本気にしてもらえてない。

でもここまできたら引き下がれない。

「絶対よ？絶対、真剣に考えてよ？」

「わかった、わかった」

「・・・全然わかってないじゃない」

「わかってるって」

「じゃあ、いつ？いつになったらお嫁さんしてくれる？」

「大人になったらだろ？」

「じゃあ私が二十歳になったら！」

また統矢が笑った。

「だーめ。俺、今二十歳だけど、二十歳なんてなってみたら、全然子供だぞ」

「いつならいいの？」

「うーん、30歳くらい？」

「遅すぎる！！私、まだ14歳よ？30歳なんて、今までの倍以上生きないとダメじゃない！」

「じゃあ、25」

「遅い！」

「二十歳との間を取って、23で手を打て」

「22」

「・・・二十歳とたいしてかわんねーじゃねーか」

「でも、私が22歳のとき統矢は29歳でしょ？ギリギリ20代同士の夫婦になれるもん」

「なれるもん」って・・・なんて子供っぽい・・・
馬鹿みたい。

でもどうしても統矢のお嫁さんにしてほしい。
ヤクザでもなんでもいい。

「わかったよ、負けた。じゃあ愛が22歳」

「・・・本当にお嫁さんにしてくれるの？」

「だから、考えとくって」

「考えるじゃダメなの！」

「22歳の愛を見て決めるよ。だから女を磨いとけ」

「・・・言ったわね？覚悟しといてよ」

「おお。楽しみだな。期待しとくよ」

そう言っただけ統矢はイジワルそうに笑った。

なによ、全然期待してないじゃない。

絶対に「惚れた」って言わせてみせるんだから！！！！

第6話

それ以来、私の人生は、まさに「女磨き」の人生だった。年一回だけ統矢と会えるクリスマスパーティー、

その度に成長する私を統矢に見せるのが、私の全てだった。

外面的な美しさはもちろん、

内面も綺麗じゃないと統矢は振り向いてくれないと思った。

お料理とかお作法とか、着物の着付けとかも習った。

統矢が「デキる女が好き」だと言ったから、

小学校から通っていたエスカレーター式の学校は出ることにした。

うちの学校の女の子は短大まで受験なしで上がって、2〜3年花嫁修業をして嫁ぐのが普通だけど、

私は大学受験をして結構レベルの高い大学に入った。

男の人とまるで経験のない女もつまらないだろうと思ったから、統矢以外の男なんて興味なかったけど、告って来る人とはできるだけつきあった。

でも時間を無駄にはできない。

だから似たようなタイプとはつきあわず、選んでつきあうようにした。

インテリ風、スポーツマンから果てはオタク系まで。

まあ、いつも結局「愛は俺のこと好きじゃないんでしょう」と言われて振られて終わったけど。

就職だって、働く必要は全くなかったけど、キャリアウーマンも経験しといった方がいいと思ったから、

一生懸命就職活動して超難関といわれる化粧品会社の内定を取り付けた。

でも意外なことに、このときは純粹に嬉しかった。まるで今までの自分が認められたように感じた。

統矢も私が成長していく過程を嬉しそうに見守ってくれた。特に大学に受かったときは、自分のことのように喜んでくれて、次の年のパーティの時に、靴をプレゼントしてくれた。気分はまさにシンデレラだった。

統矢と釣り合う女になれるように・・・

統矢と肩を並べて歩けるように・・・

そう思えば何でも頑張れた。

そして、大学4年の22歳のクリスマスパーティが来た。

統矢と初めて会ってから、9年が過ぎていた。

毎年のように、鏡の前に立ち、全身をチェックする。

今年は真紅のロングドレスだ。

髪も化粧もバツチリ。

でも胸が苦しかった。

統矢は22歳の私を見て結婚するかどうか決めると言った。今日のこの私を見て、統矢はどう思うだろう？

本当に結婚してくれんだろうか？

統矢は間違いなく私のことを好きだと思う。

大切にしてくれてると思う。

でも、それと結婚するというのは違う気がする。

統矢は私のことを結婚相手として認めてくれるんだろうか・・・

期待と不安を胸に、パーティへと向かった。

今年も統矢は開始時間ギリギリに現れた。

「招かれざる客だから」というのがその理由らしい。

確かにこのパーティの参加者から見れば

ヤクザである統矢は腫れ物かもしれない。

統矢自身も、廣野組を売り込むために仕方なく参加しているだけだ。でも私にとっては、統矢こそがこのパーティの全てだ。

濃い紫のスーツ姿の統矢を目で追った。

今年も統矢の挨拶まわりが終わったら一緒にテラスに行こう。

そして・・・統矢の気持ちを聞こう。

あれ？

今年はお父様が一緒じゃないようだ。

どうしたんだだろう、統矢一人で来ることなんてこの9年間で一度もなかったのに。

・・・いや、一人じゃない、

統矢の少し後ろに小さな女性がついてまわっている。

統矢の腕に手をかけて・・・というより、本当に小さいのでまるでぶら下がってるみたいだ。

胸がざわついた。
彼女は誰だろう？

知りたい。
でも怖い。

挨拶まわりを終えてもテラスにでようとしない統矢に業を煮やし、
私は統矢に話しかけた。
できるだけいつも通り。

「統矢」

声、震えてないかな。

統矢は少し気まずそうな顔をしたけど、すぐにいつもの優しい表情になった。

「愛。一年ぶりだな。元気か？」
「ええ、元気よ。そちらは？」

そういつて、統矢の少し後ろの女性に目を向ける。
統矢が返事をするより早く、失礼も気にせず私は彼女の全身を眺めた。

本当に小さい。
150センチもないんじゃないかな。
綺麗というよりは可愛らしい感じの女性だ。
それに随分と若いように見える。

そして・・・

私の目は彼女のお腹のところで止まった。

その大きなお腹は彼女の立場を何より雄弁に語っていた。

「妻のユウだ。ユウ、こちらは間宮財閥のお嬢様の愛さん」

「はじめまして、ユウさん」

「あ・・・はじめまして・・・」

ユウと紹介されたその女性は、少し戸惑いながら私に挨拶した。

私は、例えば、予想していた答えだったとはいえ、

「少し戸惑い」どころの騒ぎではない。

妻・・・

じゃあ・・・

結婚したんだ・・・

ユウさんを見る。

私とは明らかに違うタイプの女性だ。

外見も。たぶん中身も。

統矢はこの人を選んだ。私ではなくこの人を。

「ユウさんておいくつ？」

「えっと、19歳です」

「19!？」

私、なんて失礼な質問を・・・

しかも、なんて反応・・・

あまりの大人気なさに自分に呆れてしまう。
そんな私に、ユウさんは申し訳なく思ったのか、付け足すように言
った。

「あ、でも、来年の3月には20歳になります」
「・・・そう」

二十歳。

統矢と9つも違うじゃない。
私よりも2つも年下じゃない。

私は統矢との差を少しでも埋めたくて頑張ってきた。
統矢の横に立てるように頑張ってきた。

でもユウさんは違う。

統矢との年の差なんてまるで気にしてないみたいだ。
統矢の横に立とうとも思っていない。

ごく自然に統矢の一步後ろに立ち、それでいてごく自然に統矢と対
等だ。

統矢はそんなこの人を選んだ。

「おめでとう。お幸せに」

そう言うのが精一杯だった。

今すぐにでも帰りたいかった。
もう一秒たりともここにいたくなかった。
でも、お爺ちゃんと来ているから勝手に帰る訳にもいかない。

こんなの生殺しだ。

ならば見なければいいのだけど、どうしても目は二人を追ってしま
う。

統矢とユウさんは相変わらず部屋の隅っこの方にいた。

ユウさんは美味しそうにお料理を頬張り、

統矢がたまにユウさんのお皿からつまみ食いをしていた。

私と一緒にの時はお料理なんて食べたことなかったのに・・・

だけど統矢の表情は冴えない。

無表情・・・というより、ムスツとしている。

私といるときはいつもとても優しい笑顔なのに、どうしたんだろう。

でもユウさんはそんな統矢にはお構いなしで、

一人でしきりにしゃべり、笑っている。

遠目から見るとちょっとイタイ女だ。

統矢は不機嫌なままユウさんの方を見ようとせず、会場を見渡し
ていた。

もしかして、この結婚は統矢にとって幸せなものじゃないのかな？
政略結婚とか？

だけど、ユウさんが何を言ったのか、統矢がチラッとユウさんを見
た。

表情は変えない。相変わらずムスツとしたままだ。

でも、その瞳の奥には私が見たこともないような優しさがあった。

まるで、大切な宝物でもみているような・・・

統矢はユウさんの耳元で何か2、3言話すと、またユウさんから目を逸らし、

不機嫌そうな表情に戻った。

ユウさんは嬉しそうに、うんうんと頷き、また一人で話し出した。

私という時の統矢はいつも優しくかった。笑顔だった。

でもそれは本当の統矢じゃなかったんだ。

統矢はヤクザだ。

そんないつもニコニコしているはずがない。

今ユウさんの前にいる統矢、あれが本当の統矢なんだ。

統矢は私には本当の顔を、ヤクザの顔を見せなかった。

それは私が統矢にとって大切な存在だったから。

そう、まるで大事な妹のような・・・

負けた、と思った。

正直、どうしてせめて今日の22歳のクリスマスパーティーまで待ってくれなかったのよ、と

恨めしい気持ちもあった。

でも、今日の私を見たところで、やっぱり統矢はユウさんを選んだだろう。

統矢を責めるわけにはいかない。

恋愛は理屈じゃない。

今日は最高の日になるか、最低の日になるか、どっちかだった。それが後者になっただけ。

仕方がない。

シンデレラの魔法は解けてしまった。

私はぼんやりとシャンデリアを眺めた。

第7話

制服を見ていたから、どこの高校の生徒かすぐわかる・・・
なんて推理小説みたいことはない。

というか、制服を見ただけでどこの学校かわかるなんて、どれだけ制服マニアなのよ。

でも、私にはわかった。

だって、コータが着ていた制服を私も5年前まで着ていたから。

私立堀西学園

かなりのお金持ちの子女しか通うことを許されない、いわゆるお坊
ちゃま・お嬢様学校だ。

確かに廣野家は金銭面ではじゅうぶんすぎるくらい合格点だけど、
お家柄という点では、どうしてコータがここに通えているのかわか
らない。

統矢の話では、コータが中学生の時に彼を拾ってきたそうだから、
コータは小学校の時からここに通っていて、そのまま通わせてもら
ってるのだろう。

ということは、実家もかなりのものということだ。

コウさんが子供と出て行ったということが気になって、
結局今日も有給を取って、こうして母校に来てしまった。

でも、車を校門の前で止めた瞬間、私は後悔した。

そこには「第55回 私立堀西高等学校 卒業証書授与式」という
たて看板があったから。

・・・そうだった。

堀西の高校は、私みたいに大学受験をする生徒のために、卒業式を
1月末に行う。

2月、3月いっぱいを受験に集中できるように。

しまったなー。

あのコタつて子が高校3年なら今日確実にここにいるけど、
1年と2年なら、在校生代表の数名以外は今日は休みのはずだ。

まあ、あのヤクザ者のことだ、在校生代表なんてことはありえない。

どうしよう・・・

とりあえず式が終わるまで待つてみようか。

でもいなかったら馬鹿みたいだ。

せつかく有給まで取ったというのに。

そうこうしているうちに式が終わったらしく、

胸に花をつけた生徒がゾロゾロと校舎から出てきた。

ほとんどの生徒はこのまま4月から同じ敷地内の短大か大学に進学
するから、

卒業式といってもさっぱりしたもので、

先生達と写真を撮ると、みんなお迎えの車に乗って学校を後にした。

受験組は受験組で別れを惜しむ暇もなく、こちらもさっさと帰って
いく。

あの子・・・いるかな？

首を伸ばしてキョロキョロしていると・・・いた！！！！

卒業証書が入っている筒を肩に担いでいた。

3年生だったのか、よかった！

だけど、コータは私を見つけると苦虫を噛み潰したような顔をした。
嫌われてるのは百も承知。かかってきなさい。

コータはこの学校ではかなり珍しい徒歩通学らしく、
仕方なさそうに私が立っている校門の方へやってきた。

「・・・なんか用？てゆーか、ストーカー？」

「どうして私があなをストーカーするよの。少し聞きたいことがあるだけよ」

「俺はあんたに話すことなんてないんだけど？」

「ちょっとでいいのよ。送っていくわ。乗って」

そう言つて私は自分の車を指差した。

コータの表情が一瞬緩む。

・・・ちよろいな。

私は心の中でほくそ笑んだ。

私の車はコータくらいの歳の男なら大体が憧れるような、ちょっとイカツイ車だ。

元々、統矢が車を好きだというので、私も車について勉強をしたの
だけ、

これは私の方がはまってしまった。

しかも、どうやら車に対する私の趣向はあまり上品とは言えず、
逆に統矢に呆れられてしまったものだ。

今のコータに「乗りたいんでしょう？」なんて言ったら「乗りたいねーよ」と言って、逃げられてしまうのがオチだ。私はできるだけさりげなく、「早く乗って」と促した。

コータは渋々という感じで助手席に乗り込む。でも車内を興味深そうにキョロキョロと見回す姿はなんとも子供っぽくて笑ってしまう。

「・・・なんだよ」

「なんでもないわよ。さあ、どこまでお送りしたらよろしいかしら？ 廣野家？」

「・・・図書館」

「図書館？ どうして？」

「もうすぐ受験だから勉強しないと」

私は驚いた。

「あなた、『外組』なの？ 大学受験するの？」

「なんで『外組』なんてうちの学校の専門用語知ってるんだよ」

「だって、私も『外組』だったもの」

「・・・この卒業生？」

「そうよ。5年前に卒業したの」

「外組」とは堀西の中では、「受験して外部の学校に出て行く人」を意味する。

そのほとんどは、金銭的な理由のため「外組」というのはあまり良い意味では使われない。

「5年前・・・オバサン」

「はあ!？」

思わずギロツ睨む。

こ、この私をつかまえて、こともあるうに「オバサン」!？
なんてガキ・・・!

・・・ダメダメ、何を統矢みたいなことを・・・

「で、何？話つて」

「ええと。ユウさんて、どうして出て行っただの？」

「・・・あんた、馬鹿？心当たりねーの？」

ある。

でも。

「統矢はユウさんのこと、とても大切にしていたでしょ？」

そりゃ、外では私と浮気してたけど、統矢が一番愛していたのはユウさんよ」

「まさか」

「まさか？どうして？」

コータは刺すように鋭い目で私を見た。

運転中だから私はコータの方を見れないけど、空気でわかる。

「あんたと浮気するようになってから、統矢さんがどれだけネエちゃんに冷たかったと思ってるんだよ」

「え？」

「ネエちゃんと全く話さないどころか目も合わせないし。」

蓮だって・・・子供だって一度も抱こうとしなかったんだ」

「・・・」

「ネエちゃんはずっと我慢して、統矢さんを信じて待ってたけどさ。あれは酷すぎるよ。」

出て行って当たり前だ」

そんな・・・。

私は統矢の家庭を壊すつもりなんてなかった。

浮気しといて何言ってるんだ、と言われそうだけど、

私はあくまでただの愛人だった。

統矢はああいう世界の人だから、

ユウさんもある程度は覚悟して結婚していると思っていた。

普通のサラリーマン家庭ならそうはいかなだろうけど、

統矢の場合は、外で遊んでいても家で家族を大切にしていれば、大丈夫なはずだ。

それなのに、どうして統矢は家でユウさんと子供を大切にしなかったんだろう・・・？

私に本気になったとも思えない。それなら別れないはずだもの。

「統矢・・・どうして・・・」

「知るか」

・・・私、何かとんでもないことをしてしまったんじゃないの？
統矢から奥さんと子供を奪ってしまった。

ユウさんから夫を奪ってしまった。

子供から父親を奪ってしまった。

「ユウさんと子供は？今どこにいるの？実家？」

「知らねーよ。ネエちゃんは元々家出して廣野組の使用人になったから、実家じゃないだろうけどさ」
「・・・」

それっきり二人とも黙りこくってしまった。

第8話

「ここどこ?」

「・・・図書館」

「どこの?」

「・・・」

コータの話にショックを受けた私は、ぼんやりと運転し、気づいたら昔よく行っていた実家の近くの小さな図書館に来てしまっていた。

「あなた、どこの図書館か指定しなかったでしょ」

「普通に考えたら、家が学校の近くの図書館だと思うけど?」

「・・・ごめんなさい」

言い訳してみたけど、これはさすがに私が悪い。
素直に謝っておこう。

「勉強できれば、まあどこでもいいか」

そう言つて、コータはシートベルトを外し、車から降りようとした。
私としては、ユウさんが出て行った理由を聞けたし、もうコータに用はない。

統矢がなぜユウさんや子供に冷たかったのかはわからないけど、それはコータに聞いても仕方ないだろう。

「じゃあ、私帰るわ」

「ああ。なあ、ここ最寄り駅ってどこ?」

「・・・さあ」

「さあ？」

「だって、私ここに車でしか来たことないもの。子供の頃から私専用の車があったから、
駅なんて全然知らないわ」
「・・・」

図書館の受付で聞くと、最寄り駅はここから徒歩30分とのこと。

「全然、最寄ってないし」

「・・・そうね」

ジロっとコータが睨む。

「他の図書館まで送ろうか？」

「時間もつたないからここでいい。その代わり俺が勉強終わるまで待ってるよ」

「・・・どうして？」

「どうしてだと思っ？」

「・・・送らせるため」

「ご名答。ストーカーやってるくらいなんだから、どうせ暇だろ」
「ストーカーじゃないわよ」

「学校の校門で待ち伏せって、じゅうぶんストーカーだし」

「好きな男の子待ってる、女の子かも知れないでしょ」

「それもストーカーだろ」

「・・・夢がないわね」

でも、確かにこのまま帰っても別に家でやることもない。
私は仕方なくコータに付き合うことにした。

「俺、そろそろ帰りたいんだけど」

「もう？もうちょっと集中して勉強しなさいよ」

「・・・今、7時だけど？」

「え！？」

私は慌てて顔を上げ、時計を見た。

確かに午後7時。

もともと本が好きだったけど、社会人になってからこの1年はゆつくり読む暇がなかった。

それをここぞとばかりに読んでいたから時間が経つのを忘れていたようだ。

「・・・ちよつと、待って。今いいところなの」

「借りればいいだろ」

「あとちよつとで犯人がわかるの！今やめられない！」

コータはため息をつくと再び腰を下ろして英単語を勉強し始めた。

「『ターゲット』！？なつかしい・・・まだあるんだ」

「さっさと読めよ」

「そういえばさっき、赤本やってたよね？あれ、H大の？H大を受けるの？」

「そうだよ」

「・・・受かると思ってるの？」

「さっさと読めって」

結局私たちが図書館を出たのはそれから30分後のことだった。

「腹へったー」

「それ、奢れっていつてるの？」

「はあ？」

コータが馬鹿にしたように私を見る。

でも、確かに、卒業式の後、すぐ図書館に来たから、
昼ごはんも食べていない。

さすがに私もお腹がすいた。

「K駅で降ろして」

「K駅ってどこ？」

「・・・学校の近くだよ」

「へえ。私、学校も電車で行ったことないから知らなかった」

「・・・」

本当なんだから仕方ないでしょ。

「廣野家まで送るわよ」

「腹がもたない。K駅のマックで食っ」

「受験生が夕食にファーストフード？身体によくないわよ。風邪で
もひいたらどうするのよ」

「・・・うるさいオバサン」

「あのね！そのオバサンってやめてよ！私は・・・」

「間宮愛だろ。間宮財閥のおじよーさま」

「私のこと知ってたの？」

「組長の愛人の名前くらいはね」

コータが嫌味っぽく言う。

私もさすがに言い返せない。

「ネエちゃんがいた頃は、毎日弁当作ってくれてたから、夜くらいファーストフードでも平気だったけど、最近昼飯も適当だから、やっぱりちゃんと食おうかな」

更に嫌味っぽく言う。

この・・・！

「何よ、やっぱりタカッてるんじゃない！」

「タカってないって」

弱味を握られている私としては、仕方ない。

私はため息をついて、どこに連れて行こうかと考え始めた。

「さっきの図書館といい、あんたって結構面白いな」

「そう？」

目の前の店を見てコータが言う。

食べるころなんて、連れてきてもらう専門だから、

誰かを連れて行くななんて初めてで、どこがいいかさっぱりわからなかった。

しかも高校生の男の子。

「私が普段友達と行くような小洒落た小料理屋じゃ量が足りないだろうし、

ちゃんとしたコースの店だと、堅苦しいかな、と思って・・・」

「で、ここ？あんたは車だし、俺は高校生だぞ」

どこにでもある全国チェーンの居酒屋。
さすがにまずいかな。

「お酒を飲まなければ問題ないでしょ」

「こういう場合、普通はファミレスなんじゃない？」

「ふぁみれす、って何？」

「・・・もういい、早く食いたい」

お店は平日のせいか結構空いていて、すぐに案内してもらえた。

「私はウーロン茶」

「俺、生中」

こちらこちら。

私は小声でたしなめる。

「何言ってるの、ダメよ。未成年でしょ」

「言わなきゃわかんないし」

いつの間にか、高校のブレザーは脱ぎ、学校指定の鞆をそれであるでる。

これでどこの生徒かはわからないし、もう今日卒業したんだし・・・

「って、そんな問題じゃない。この後、家でまた勉強するんですよ？飲んだらできないでしょ」

「廣野組ではビール5杯まではソフトドリンクとみなされてるから」

「・・・」

「これが廣野流。てゆーか、統矢流。文句ある？」

「・・・」

結局、私はウーロン茶でコータがビール。

大いに疑問が残るけど、口の達者なコータにはかなわない。

「うーん、卒業おめでとう」

「何それ？」

「何に乾杯しようかな、と思つて。私にはどうでもいいけど、それくらいしか乾杯することないし」

「・・・まあ、いつか」

こうして私たちは、何故かコータの卒業に乾杯して飲み始めた。

第9話

「ファミレスは知らないくせに、こーゆー居酒屋は知ってるんだな」
「大学のサークルとかで来たことがあるから」
「ふーん」

コータはさすがに5杯、とはいかなかったけど、
本当にソフトドリンクのようにビールを飲む。
カッコつけている、とかいう風でもない。

・・・廣野組の、いや、統矢の教育の賜物が。

二人ともお腹が少し満たされ、少しギスギスした感じがなくなってきた。

そこで私は前から気になっていたことを聞いた。

「ねえ、ユウさんでどんな人だったの？」

あの統矢を射止めたユウさん。

やっぱりその人となりが気になる。

でもコータの答えは至ってシンプルだった。

「ふつー」

「え？」

「どこにでもいる、ふつーの女」

「・・・」

「顔は普通だし、背はちっちゃいし、胸もちっちゃいし。」

あ、でも廣野組に来た時は、処女だって言ってたなー。

18歳でしたことない、ってゆー意味ではふつーじゃないのかも」

そうね。

って、なんてことを。

「女性の前でそういう話はしないでよ」

「統矢さん譲りだから」

「・・・あなたって、本当に意地悪ね」

「それも統矢さんに文句言って。統矢さんもネエちゃんをいつもイジメて、振り回して泣かせてたから」

「・・・」

本当にああ言えば、こう言う。

でも、いい加減コータの嫌味にも慣れてきた。

コータの嫌味は思い切りが良すぎて、いつそ気持ちいい。

「ふつーって言うけど、じゃあどうして統矢はユウさんのこと好きになったの？」

「ネエちゃんは・・・なんて言うか鼻の利く人だったから」

「鼻？」

「この人はこういうことをしてあげたら喜ぶだろうな、って言うのを嗅ぎつけるのがうまかった。」

そして、何の下心もなく、あっさりとそれをするんだよね。俺に弁当作ってくれてたみたいにな」

私も統矢が喜ぶと思って、必死に自分を磨いてきた。

でも、統矢が好きになる女の人は・・・結婚相手に求めることはそんなことじゃなかった。

初めから・・・10年前から私は間違っていたのかもしれない。

手をギュッと握り締める。

そんな私の気持ちを察したのか、コータは変な話をし始めた。

「あと、ネエちゃんは面白い女だった」

「面白い？」

「うん」

そう言つて、ユウさんの武勇伝とも言える話をたくさんしてくれた。

そもそもユウさんが廣野家にきたのは、酔いつぶれて組員にお持ち帰りされてきた、とか

統矢を怒らせて日本刀で髪を切られた、とか、

組員同士の喧嘩に首をつつこんでビール瓶で殴られて病院送りになった、とか

前の組長（統矢のお父様）と統矢に同時に身体を求められて昼夜問わず二人の間を行き来してたとか、

前の組長の命令で統矢に内緒で勝手に妊娠しちゃったとか・・・

「俺のせいで、男に襲われたこともあったな・・・」

「え？」

「さすがにあの時は俺もへこんだなあ」

よく今まで生きてたわね・・・

本当なら、私がかかり落ち込んでいい話もあったけど、

あまりに現実離れた話だからなのか、コータの話し方が気を使わせないからなのか、

私はまるで他人事のように興味深く聞いていた。

中でも衝撃的だったのは・・・

「え？寝てる間に統矢のオデコに『肉』って書いた？」

「しかも油性の赤マジックで」

そう言つて、コートは自分のオデコに指で「肉」と書いた。

信じられない。

あの統矢にそんなこと・・・

「肉」って・・・

「ふふふふふ・・・ユウさんてほんと、面白い人ね」

するとコートがちよつと意外そうな顔をした。

「何よ？」

「あんたもそんな風に普通に笑うんだな」

「当たり前でしょ。人間なんだから」

「ふーん」

「・・・コートこそ、もう少し高校生らしく爽やかで素直になれないの？」

「じゅっぶん爽やかで素直だと思うけど？それに気安く『コート』なんて呼ぶな」

「苗字は？」

「・・・そんなもんヤクザには必要ない」

「また、カツコつけて・・・じゃあなんて呼べばいいのよ？」

「・・・幸太」

どう違うのよ。

第10話

車を止めてエンジンを切る。

時間は午後6時50分。

20分だけ。

20分だけ待ってみよう。

目の前には母校の校門があった。

大学受験をする「外組」は、卒業式が終わっても学校で毎日勉強する人が多い。

私もそうだった。

そして昨日、幸太は7時に勉強を終えた。

たぶん幸太の中で、なんとなく7時が勉強の一区切りの時間で、家に帰ることにしてるのだろう。

わざわざ残業もせず帰ってきて、こんなところで・・・

何やってるんだろう、私。

これじゃ幸太にストーカーだと言われても仕方ない。

私はシートに深く腰をかけなおした。

7時7分。

出てこないな・・・

もう帰っちゃったのかな？

まだ勉強してるのかな？

それとも・・・学校で勉強していないのかもしれない。

昨日は卒業式だったから学校の図書室が使えず、外で勉強したのか
と思ったけど、

もしかしたら幸太は元々、学校ではなく図書館で勉強する派なのか
もしれない。

確かにそういう生徒はいた。

周りに友達がいると集中できないから、と言って。

仕方がない。

帰ろう。

そう思つてキーを回そうとした時、
校舎から出てくる幸太の姿が見えた。

それ以来、私と幸太は毎日会つた。
といつても、幸太は受験を控えている。

私が7時に学校へ迎えに行き、幸太の教えてくれた「ファミレス」
で夕食をし、
廣野家の近くまで送っていく。
しめて1時間ちよつと。

だけどそれが私の大切な時間になりつつあった。

普段は電車通勤だけど、幸太を迎えに行くために毎日車で通勤した。仕事が忙しい時は、始発並みに早い時間に出社して、帰りはなんとか7時に間に合わせた。

3月に回せる仕事は全部3月に回した。

それでも突発で残業しないといけない時は会えなかった。

そういう時は、幸太も会えない時間を勉強に回し、次の日に少し長めに食事の時間を取ってくれたりした。

そんなちよつとした気遣いが、統矢はしてくれなかった気遣いが、嬉しかった。

幸太は本当に頑張っていると思う。

朝7時から夜7時までみつちり勉強し、家に帰ってから勉強しているようだ。

そんなにH大に入りたいの？と聞いたら、

「法学部に行って、司法試験受けたいんだ。弁護士になって将来統矢さんを助きたい」

と照れくさそうに言った。

「まあ、ネエちゃんからの受け入りだけどね」

ううん。

立派な夢だと思う。

私が言うのも変かもしれないけど頑張ってほしい。頑張っつて統矢の右腕になってほしい。

そしてできれば、私はそれを側で見守っていたい。

受験の前日、幸太はさすがに学校にも行かず家にこもって勉強していた。

でも、会社帰りに少しだけ会ってくれた。
どうしても直接、頑張つてと伝えたかった。

幸太は「うん、ありがとう」とはにかんだ。

H大の試験は2日間に渡って行われる。

普通の大学は1日で終わるけど、H大ぐらいになると、
科目数も多いし、1科目の受験時間も長い。

受験生は勉強という面でも大変だけど、精神的にも体力的にも辛い
だろう。

1日目が終わった夜、幸太に電話がメールをしたかったけどやめて
おいた。

別にメールの一つやり取りしたところで合否に響くとは思えないけ
ど、

この2日間は幸太に受験の世界にはまっておいてほしかった。
下手に他のことに気を回さないで欲しかった。

なんて。

大人ぶってみたけど、正直辛かった。

たった1日、幸太の姿も声もなしで過ごすのが想像以上に辛かった。

私って幸太のこと好きなんだなあ、と今更ながらに気づき、
ほんの2ヶ月前に「もう二度と恋なんてしない」と泣きじゃくって

いた自分に恥ずかしくなった。

10年間も統矢のことが好きだったのに。
なんたる変わり身の早さ。

でも、これは私のせいじゃない。
幸太のせいだ。

私は悪くないもん・・・。

明日は日曜日だから携帯はサイレントにしてアラームも切っておこう。

さすがに幸太からも連絡はないだろう。

明日も長い一日になりそうだ・・・

できるだけ遅い時間まで寝ていよう・・・

私は携帯を握り締めて、ふてくされながらベッドに入った。

それなのに、翌朝は6時に自然と目が覚めてしまった。

携帯を見ると、昨日の11時に幸太から「おやすみ」とメールが来ていた。

第11話

1分ってこんなに長かったわけ？

遅々として進まない時計にイライラした。

11時にお昼ご飯を食べて、私は勝手に早めの午後をスタートさせた。

ほら、もう12時よ。

立派にお昼よ。

すぐに夕方になるわ。

幸太の受験が終わるのは5時頃のはずだ。

・・・まだ5時間もあるじゃない。

一体、何をそんなに試験問題を出す必要があるのよ？

日本史なんてたった4問なんでしょ？

たった4問なのにどうして受験時間が1時間以上もあるのよ？

いっそ平日だったら仕事があって気を紛らわせられたのに、休みだとそうもいかない。

いや、この分だと仕事があったら全く集中できなかっただろうから、休みでよかったのかも・・・

映画でも見に行こうかと思ったけど、これも頭に入りそうにない。

・・・仕方がない。

私は部屋の掃除を始めた。

就職祝いにお爺ちゃんが買ってくれたかなりお高めの2LDKのマンション。

同じく就職祝いでお父さんが買ってくれた車を止めてある駐車場代だけで、

普通の賃貸マンションが駐車場付きで借りられて、お釣りもくる。

そんなところに社会人1年目のOLが一人暮らし。

目立つこと、目立つこと。

どうせ「どつかのお偉いさんの愛人」って目で見られているんだろう。

まあ、あながち間違ってないし。

キッチン、リビング、お風呂、トイレ・・・と順番に掃除し、最後に寝室を掃除する。

時計をみると、3時。

まだ後2時間。

いや、試験が終わったからと言って、すぐに会えるわけじゃない。つてことは、後3時間くらいは・・・

いつそお隣さんの家も全部掃除してあげたい。

もちろんそういう訳にもいかず、これまた仕方なく買い物に出かける。

でもデパートまで行く気にもならない。

近くのスーパーで食材を買おう。

料理はあんまりしないから、買う物もないけど。

パン、卵、牛乳、バター、コーヒー、後はハムと・・・お酒。あ、おつまみも。

うわ、「寂しいOL代表」って感じの買い物だ。

家に帰り、買ってきたものを冷蔵庫に入れ、テレビを点ける。

・・・4時。

まだ先は長い。

今から何をしよう。

幸太は今頃最後の科目をやってるんだろうな。
頑張って。

終わったら早く会いたいよ。

そうだ！

大学まで迎えに行こう！

そうしたらすぐに会えるじゃない！

23歳の女の行動じゃない、っていうか、かなり変な女だと自覚しながらも、

急いで着替えて、化粧も直して駐車場に向かう。

いいじゃない！

この2日間我慢してたんだから！

大学についたのは5時少し前だった。

小さな大学で、お客様用の駐車場もないため、路駐だ。

大学の前で路駐って目立つかな、と思ったけど、

我が子の帰りを待っているらしい親の車で大学前の通りは路駐天国。

堂々とその仲間に入れてもらう。

5時半を過ぎたころ、開放感と一種の虚無感を顔に浮かべた受験生達が一斉に出てきた。

バラバラと車に向かったり駅に向かったりする。

私はドキドキしながら受験生が来る方向を見た。

すると、どこから来たのか、突然幸太が私の目の前に現れた。

「愛のことだから、来てくれてると思った」

そう言って、ニコツと笑った。

第12話

私は、幸太が乗るとすぐに車を発進させた。

幸太にどこに行くかとも聞かないし、
幸太もどこに行きたいと言わない。

自然と私は自分のマンションに向かった。

車中、「おつかれさま、どうだった？」と聞いたけど、
幸太はさすがに疲労困憊という感じで、

「やるだけやったし、大きな失敗はなかったから・・・後はもう神任せ」

と息をついた。

「後期の勉強も一応しとかないなー。後期もH大だけど、T大滑った奴とかが受けにくるから後期は厳しい・・・」

らしい。

でも、幸太には申し訳ないけど、今の私は取り合えず幸太に会えたから万々歳だ。

私の機嫌に比例して車のスピードも速くなる。

「俺、ビーエムの黒いセダン飛ばす女って好きじゃない・・・」

悪かったわね。

「免許、取らないの？」

「大学生になれたらね。でも金ないし。司法試験に受かってからバイトしながら取るよ」

「それくらい、統矢が出してくれるでしょ？合格祝いとかでおねだりしてみたら？」

「たださえでも居候の身だし、大学の金も出してもらうことになるからさすがに頼めない」

「じゃあ、合格したらお祝いに私が教習所代をプレゼントするわ」「いない」

「どうしてよ？」

「・・・なんか、嫌だ」

「そう？じゃあ何がほしい？」

「まだ受かってないし」

「じゃあ、考えといて」

幸太は返事をせず窓の外に視線を移した。
何を考えているのか・・・は、マンションについたらすぐにわかった。

玄関に入るなり、幸太はキスしてきた。
しかも・・・離してくれない。

どうしよう。

さすがに玄関で、は、嫌だ。

なんとか靴を脱いで上がる。

寝室まで、わずか数メートル。

普通に歩けば10秒もかからないのに、私たちはその入り口までたつぷり20分はかった。

でも、せっかく頑張つて(？)ここまで来たのに、

幸太は寝室に入るのを拒んだ。

なんで？と聞いたたら、呆れられてしまった。

男心がわからないのか、と。

・・・ああ、そういうことか。

「統矢はこのマンションに来たことないわよ」

「え？どうして？」

「さあ・・・」

「そっか・・・」

という訳で、ようやくベッドまでたどり着いた。

統矢はここに来ようとはしなかった。

付き合っていたときは、それが寂しかったし悲しかった。

でも今は心の底から感謝したい。

目が覚めたのはもう12時近かった。

こんなつもりじゃなかったけど、掃除しておいてよかった・・・
なんて女らしく現実的なことが頭をよぎる。

隣を見ると、幸太は私を抱きしめたままスヤスヤと眠っている。

つぶ。

思わず噴出す。

高校生だから本当に若いんだけど、それにしてもこの寝顔は若すぎる。

中学生みたい。

そういえば統矢の寝顔って見たことがない気がする。

いつも私の方が先に寝てしまい、統矢の方が先に起きていた。

あまり気にしなかったけど、今思えば統矢にとって私は安心して一緒に眠れる女ではなかったんだろう。

それに引き換え、この幸太は・・・

なんだかイタズラがしたくなってきた。

ユウさんが眠っている統矢のオデコに「肉」って書いた気持ちが物凄く良く分かる。

なんか、こう・・・愛おしすぎてイジメたくなる。

でもさすがに「肉」はないなあ、どうしようかなあ・・・と考えていると幸太が目を覚ました。

「あれ？今何時？」

「12時よ」

「まだ12時・・・おやすみ・・・いや、やっぱり・・・」

そう言ってまたキスしてくる。

そうだ。

いっつもしてやられてばかりだから、たまにはギャフンと言わせてやろう。

「幸太は手馴れてるわね。服はともかく、ストッキング脱がすのが上手すぎる。」

思わず破っちゃうくらいの愛嬌はないの？」

「統矢さんに脱がし方、教えてもらった」

「・・・」

そうきたか。

じゃあ、逆にそれを使ってやろう。

「でも、統矢は絶対玄関で押し倒してきたりしないわ。大人だもの」

「・・・」

ふふふ。

お姉さんを舐めるんじゃない。

「愛はそういうこと言わない程度に大人だと思ってたけど、意外と子供なんだね」

うっ

「それに、統矢さんはいきなりネエちゃんの部屋に押しかけて、無理矢理やっちゃったんだよ？」

ネエちゃん、初めてだったのにかわいそーに」

「・・・」

「ふふん」

「・・・・・・・・ごめんなさい。負けました」

「素直でよろしい」

幸太は満足したように不敵に笑うと、

私を抱きしめた。

「俺をイジメたいなら、シンプルに『統矢の方が上手だわ』とか言
つときゃいいのに」

なるほど。

「でもまあ、それは仕方ないわよね。幸太はまだ18だし、統矢と
一回りも違うんだから」

「・・・本気で言ってる？」

「何を？」

「・・・・・・・・・・もういい」

そついうと幸太は布団を頭までかぶって私に背を向けた。
何????なんで怒ったの???

まあ、いいか。

私は幸太を後ろから抱きしめて、また眠りについた。

第13話

3月10日

何回携帯を開いたり閉じたりしたことが。

「間宮さん、どうしたの？何か大切な用事でもあるの？」
「あ、すみません・・・」

会社でいわゆる「お局様」に声をかけられた。
でも彼女は「お局様」と言っても、嫌味な人じゃない。
どちらかというと、超ベテランのキャリアウーマンで尊敬できる人だ。

「ふふ、いいのよ。彼氏？」
「はい・・・今日、合格発表で」
「合格発表？何の？」
「・・・大学の・・・」
「大学！？随分と若い彼氏なのね」
「はい・・・」

思わず赤くなる。

幸太のことはもちろん高校生と認識してつきあってきたけど、よく考えるとわたしより5歳も下なんだ。
うわ、これって犯罪？

「合格してるっていわね」
「そうなんですけど。連絡がこないから怖くって」
「そうねー。こういうことはこっちから聞けないしね」

「そうなんです・・・」

もう3時だ。

とつくに合否は出ているはず。

どうして連絡くれないんだろう。

・・・ダメだったのかな・・・？

親の仇のごとく携帯電話を睨んでいると、

突然電話がなって、心臓が止まるくらい驚いた。

「もしもし、幸太！？」

「あ、ああ・・・ビックリした・・・出るの早すぎ」

「だって、待ってたから・・・」

「仕事中だろ？今、大丈夫？」

大丈夫じゃなくても出るわよ！

「ど、どうだったの・・・？」

「うん。受かったよ。入学手続きもしてきた」

「なんだーーーー」

私は思わずその場にしゃがみこんだ。

受かってたんだ・・・

なんだ・・・

よかった・・・

「おめでとう」

「ありがと」

「・・・どうしたの？なんか元気ないみたい」

「いや・・・気が抜けちゃって」

「ふふふ」

「今日、家行っていい？」

「うん。待ってて」

合鍵は渡してある。

でも定時になったら上がれるように頑張ろう。

私はスッキリした気持ちで携帯を閉じるとデスクに戻った。

それでも家に着いたのは7時過ぎだった。

幸太はリビングでぼんやりとテレビを見ている。

こんなぼんやりした幸太は初めだ。

いつも勉強してたから。

私もそうだったな。

1年間ずっと勉強しぱなしかったから、急に勉強しなくて良くなる
と、

何をしていいか分からなくなるんだよね。

「あ、おかえり」

「ただいま。よかったわね、大学」

「・・・うん」

「・・・どうしたの？」

幸太の隣に腰を下ろす。

おかしい。

いくら気が抜けたと言ってももうちょっと喜んでもいいんじゃない

の？

「・・・」

「幸太？」

「喧嘩した。統矢さんと」

「・・・え？」

思わず凍りついた。

組長と組員が喧嘩って・・・何それ。

「喧嘩って言っても統矢さんは怒ってないんだけどさ。」

俺の統矢さんに対する態度があまりに悪いって、幹部に怒られて・・・

「思わず統矢さんにも今まで我慢してたこと一気にブチまけて飛び出してきた」

――今まで我慢してきたこと

それは、きっとユウさんのことだろう。

廣野家の中で、この一年、ユウさんと子供は、統矢と私の浮気のせいで肩身の狭い思いをしてきた。

辛い思いをしてきた。

そして結局統矢と別れて家を出た。

ユウさんを本当のお姉さんのように慕っていた幸太には辛い出来事だっただろう。

でも、ユウさんの気持ちを尊重して、幸太は統矢に楯突いたり文句を言ったりしてこなかったようだ。

それが、今こんな形で出てしまった。

胸が苦しくなった。

私のしたことが、巡り巡ってこうやって幸太を苦しめてしまっている。

「俺、廣野組に來た時から、いつか統矢さんの役に立ちたいと思って頑張ってきた・・・」

でも、統矢さんのネエちゃんに対する態度が冷たくなって、俺ちょっと気持ちが悪くじけそうになってたんだ。

だけど、例え統矢さんがネエちゃんと蓮を捨てても、俺が組で偉くなれば、

ネエちゃんは俺のネエちゃんとして、組で肩身の狭い思いしなくて済むかなと思って、

余計に勉強頑張ってたんだ」

「・・・」

「でも、結局ネエちゃんは出て行った」

「じゃあ、どうして今まで勉強頑張ってたの？」

「勢い・・・ってゆーか、情性？」

「・・・」

「だけど今朝、合格してるの見て、なんか空しくなった。

俺、なんのために大学行くんだろって。こんなんで本当に次、司法試験頑張れるのかわかって。

組員はみんな組長の為なら何でもする覚悟なのに、俺、今統矢さんのためにそこまでできるのかな・・・」

それは、今まで心のどこかで私が恐れていた言葉だった。

そして、おそらくそれはユウさんも同じだ。

ユウさんは幸太にしきりに「統矢さんのために頑張って」と言っていたという。

それはこういう事態を心配していたからだろう。

幸太は中学2年の時に家出して、統矢に拾われ廣野組に入った。
そんな幸太が統矢についていけなくなったら、幸太はどうなるんだ
ろう。

もちろん私が一緒に暮らしてもいい。

それくらいの余裕はある。

でも、それは幸太が許さないと思う。

それに・・・幸太の人生の目標がなくなってしまう。

「統矢さん、どうしてネエちゃんと別れたんだろう・・・」

幸太が小さく呟いた。

それは私に対するあてつけでも、皮肉でもなく、
純粹な疑問だった。

それだけに私の胸をついた。

確かに、どうして統矢がユウさんを手放す気になったのかはわから
ない。

でも、そうさせたのは間違いなく私だ。

私は統矢とユウさんと蓮君という一つの家族を壊しただけでなく、
大好きな幸太から、お姉さんも、
更にお兄さんも人生の目標も奪ってしまおうとしている。

・・・幸太には話したくなかった。
統矢と私のことを。

どうして統矢が私を愛人にしたのか。

どうして統矢が家庭より私を優先させていたのか。

統矢といるとき、私がどんな女だったか。

幸太に嫌われるのが怖かった。

でも・・・

私は幸太の肩にもたれかかると、口を開いた。

第14話

22歳のクリスマスイブは人生最悪の夜だった。

家に帰ってくるなり、着替えもせず化粧も落とさず、ベッドにつつぷして、とにかく泣きまくった。

正確に言うと、帰りの車の中でも堪えきれず泣いていた。お爺ちゃんも、さすがに私が統矢のことを好きなのを知っている。なんと言っても9年間の片思いだ。

そこへ今日の出来事。

慰めの言葉も出てこないのか、私が泣いていることに気づかない振りをしていた。

でも、それがお爺ちゃんらしい気遣いに思えて嬉しかった。

ううん、

もしかしたら、お爺ちゃんは喜んでいるかもしれない。

孫娘がようやく片思いしていたヤクザと切れるのだ。

内心ホッとしているに違いない。

だけど、今はお爺ちゃんのそんな心中もどうでもいい・・・

泣けるだけ泣きたかった。

泣いたら少しは気が治まるような気がした。

でも違った。

泣けば泣くほど感情が昂ぶってしまい、余計に泣けた。

心の中で、何回も統矢に毒づいた。

あんなに好きだった統矢を悪く思いたくなくかつたし、そんな風に統矢のことを忘れたくはなかった。

でも苦しくて苦しくて他にどうしようもなかった。

真面目に考えるとか言っつて、最初から私のことなんて女として見てないじゃない！

もしかして去年のクリスマスパーティーの時にはもうユウさんと知り合っつてたんじゃないの？

それなのに、去年はいつも通りなんともない顔して・・・

ううん、今年だって、別に私に対して申し訳なさそうにするでもなく、相変わらずだった。

私は9年間も統矢のことしか考えてこなかったのに。
酷すぎる！

そんなことをずっとずっと考えては泣いていた。
もうこのまま泣きながら死んでしまいたい・・・

本気でそう思っつた。

でも泣いてるくらいじゃ人間は死なないようだ。
大学も冬休みなのをいいことに、三日三晩泣き通して、ようやくベッドから起き上がった。

なんてヒドイ顔・・・

これ、本当に私？

思わず笑っつてしまい、とにかくお風呂に入った。

そういえば、お腹もすいたし喉も渴いた。

でも、もう何もする気力が起きない。

私は再びベッドに突っ伏した。

するとまた涙が出てくる。

まだ身体に水分が残ってたんだ。

人間て不思議だなあ・・・

お父さんとママはもちろん、お爺ちゃんも心配して時々私の様子を見に来た。

でも、見に来てもらったところで私は元気になるはずもない。

元気になる方法は、統矢が私の方を見てくれることだけだ。
でももう二度とそんな日はこない。

そう思うとまた泣けた。

その日の夜。

私は窓からぼんやりと月を見ていた。

泣いては寝て、寝ては泣いての繰り返しで、もう身体は昼夜の区別もつかないようだ。

すると、門の外から一台の車が闇夜にまぎれるように入ってきた。
そして静かに正面玄関に横付けされた。

こんな時間に誰だろう、と思っていると、
後部座席から誰かが降りてきた。

—— 統矢！？

思わず大声で叫びそうになったのをグツと飲み込んだ。

どうして！？

どうして統矢がうちに来るの！？

そう考え終わらないうちに私は部屋を飛び出した。

たぶん相変わらずひどい顔をしていただろうけど、そんなことはもうどうでもよかった。

応接室に入ろうとして、ふと思い当たった。

こんな夜中に隠れるようにしてやってきたのだ。

応接室で堂々と誰かと面会・・・という訳ではないだろう。

「誰か」

思い当たるのは一人しかない。

私は、すばやくお爺ちゃん執務室に滑り込み、部屋の中のインタ

ーホンのスイッチを入れ、

今度は台所へと走った。

お爺ちゃん執務室には、台所へ通じる内線が引いてある。

お手伝いさんにコーヒーとかを頼めるように、この家を建てたときに付けたそうだ。

私がさっき執務室で入れてきたスイッチがそれだ。

これで、台所のインターホンで執務室の中の会話が聞ける。
そのかわり、こちらの声も執務室に聞こえるので、音を立てるわけにはいかない。

私は息を殺して、インターホンにへばりついた。

2、3分すると、インターホンの向こうで扉を開ける音がした。
数人の足音がする。

やっぱり・・・

お爺ちゃんには人に会わせたくない客がくると、いつもこっそり執務室へ連れて行くのだ。

統矢はヤクザな上に、孫娘の片思いの相手だ。

「今、人に会わせたくない客 NO・1」だろう。

『かけてくれ』

お爺ちゃんの声がした。

『結構です』

統矢・・・

統矢の声だ。

私は思わず、パジャマの胸の辺りをギュッと握り締める。

『こんな夜中に呼び立ててすまなかったな』

『いえ』

『君に前置きなんかは必要ないだろう。単刀直入に用件だけ言わせて貰う。孫のことだ』

もちろん統矢の顔は見えない。

今、どんな表情をしたのだろう・・・

『クリスマスパーティー以来すっかり部屋に閉じこもっててな。食事もしない』

しばらく間が空く。

『少し、愛の相手をしてやってくれんか？』

『相手？愛さんを愛人にしろとでも？』

『そうだ』

そつだ、じゃない！！！！！！

何言ってるの、お爺ちゃん！！！！

いや・・・変わり者のお爺ちゃんらしい発想だと言えばそれまでだけれど・・・

そんなこと統矢が承知する訳ないじゃない。

ううん、承知しないでよ、統矢。

そんな話、蹴飛ばして。

私になりたいのは、統矢の愛人じゃない。

奥さんだ。

だけど・・・

嫌な予感がした。

『愛さんが了解すると思えませんが』

何よ、それ。

私が了解すれば、統矢は私を愛人にするの？
あなた、もうすぐ子供だって生まれるのよ？

『君が了解させてくれ。このままでは愛は身体を壊しかねん』

また、間が空く。

統矢・・・

何を考えてるの？

『・・・わかりました』

わかりました？

私はわからないわ。

気づいたら、執務室の前まで走っていた。

扉の前に、廣野組の護衛と思われる強面の男達が数人立っていた。

私が構わず中に入ろうとすると護衛の一人が私の前に立ちはだかり、
「入るな」と言った。

私は世間的に見れば「いいとこのお嬢様」だ。

普段は上品だし、言葉遣いだって・・・

でも、この時ばかりはキレた。

ブチキレるってこーゆーこと言うんだなあ、と後で思った。

「ふざけるな！！！！私はここの娘よ！！！！さっさと退きなさい！！
！邪魔するな！！！！！！！！」

男達は一瞬顔を見合わせ、どうしたものかと言う風に肩をすくめた。当たり前だけど、私の言葉にひるむ様子もない。

だけど私の声はじゅうぶんに部屋の中に聞こえていたらしく、中からお爺ちゃんの声がした。

「愛か？・・・入れ」

私は、ふんつと男達を一瞥して堂々と中に入った。当然でしょ、あなた達なんかに邪魔させないわ！

中に入ると呆れた顔のお爺ちゃんと、
・・・無表情の統矢がいた。

「聞いてたのか？」

「ええ、そこから」

そう言つて、インターホンの方に顎を出す。

「・・・いい趣味とは言えんな」

「お爺ちゃんに言われたくないわ。孫をやクザの愛人にしようだなんて」

わざと統矢の方は見ずに言つた。

「嫌か？」

「嫌よ、愛人なんて」

「だったらさつさと立ち直るんだ。失恋の一つや二つでいちいち落ち込んでたら身体が持たんぞ」

「・・・失恋の一つや二つ？」

思わず笑ってしまった。

「一つも二つも、私は統矢にしか恋したことないわ！これからだつてない！

生涯一度の失恋なんだから、いくら落ち込んだっていいでしょう！？ほつといて！！」

いつの間にか涙がボロボロこぼれていた。

ああ、かつこ悪い・・・統矢がいるのに・・・

つて、もう統矢の目は気にしなくていいんだった・・・

「間宮さん、少し愛さんをお借りします」

突然、統矢はそういうと、私の手を引いて部屋を出た。

あまりに驚いた私は成されるがまま、統矢についていった。

「愛。お前の部屋、どこ？」

「え？2階・・・」

統矢は私に自室へ案内させ、中へ入った。

「愛」

「ごめんなさい、統矢。お爺ちゃんが変なこと言い出して」
「・・・」

「私なら大丈夫だから、お爺ちゃんが言ったことは忘れて」

本当は全然大丈夫じゃなかったけど、

ここは大丈夫と言うしかない。

でも統矢は納得してくれなかった。

どうしてほつといてくれないのだろう、と思ったけど、その答えは後で体重計が教えてくれた。

たった数日で私は5キロも痩せていたのだ。

見た目にも随分とやつれていたのだろう、さすがに統矢もほつておけなかったようだ。

「・・・お前は俺と一緒にいたくないのか？」

「いたいに決まってるじゃない。でも愛人なんてイヤ」

そう言い切ると、統矢が笑った。

いつものあの優しい笑顔で。

「お前は、9年も俺を追いかけてたのに、あっさりとユウに渡すのか？」

「・・・」

「ユウから奪い返してやろうとは思わないのか？」

「奪い返されてくれるの？」

「それは愛次第」

「またそれ？9年前も同じこと言ってたじゃない。でも結局ユウさんを選んだんじゃない」

「そうだな。去年の愛じゃ、まだまだだったからな」

優しい笑顔から少し意地悪い笑顔に変わる。

「今の俺にユウは必要だ。手放せない。だけど愛がいるなら手放してもいいかな、と思わせてみる」

「・・・」

「自信ないのか？ユウなんてまだ知り合って2年も経ってないんだぞ。愛は9年も俺を見てたんだろ」

統矢の挑発的な言い方に唇を噛む。

こんな言い方されたら引き下がれない。

「自信、あるわ」

「おお、じゃあ頑張ってみろ。ただし期限付きだぞ」

「いつまで？」

「そうだな・・・1年でどうだ？」

「・・・わかったわ、じゃあ来年のクリスマスまで。12月25日の夜まで・・・」

私の夢。

それはあのパーティに統矢と一緒に出て、そのまま一緒にクリスマスを迎えること。

来年のクリスマス、結局私はまた泣いているかもしれない。

ううん、たぶんそうなるだろう。わかってる。

私もそんなに馬鹿じゃない。

でも、少なくともこの夢は叶えられる。

例えばそれが統矢との最後になっても。

統矢は私を抱き寄せると、そっとキスをした。

こうして、私は統矢の愛人になった。

第15話

統矢が私を愛人にしてもいいと思った理由。
いくつかあるだろう。

まずは単純な同情。

それと、長年自分を思ってきた女を振ったという罪悪感。

それに・・・

統矢への想いは私の全てだった。

それをバツサリ断ち切ってしまうとどうなるか・・・

統矢は敢えて挑発的な言い方をして、私が統矢のことを思い続けられるように仕向けた。

私に、統矢を奥さんから奪い返すという目標を与えた。

これは統矢の奥さんであるユウさんを傷つけることにもなる。

それでも統矢は私のために、敢えてこういう風にしてくれたのだ。
その気持ちが嬉しかった。

ほんの少しでも、ユウさんより私を優先してくれたことが嬉しかった。

パーティの時に会った、人のよさそうなユウさんの笑顔を思い出す。
私は何も本気でユウさんから統矢を奪い取ろうとは思っていない。

ただ・・・

少しだけ統矢の気持ちに甘えて、統矢を借りたい。

9年間も思い続けてきたそのご褒美、というのも変だけど。

車で帰っていく統矢を窓から眺めた。

結果としてお爺ちゃんの企みどおりになった。

少しの間だけ、私を統矢の愛人にしておいて、私を立ち直させる。

統矢も私もその作戦にまんまと乗ってしまった。

統矢も乗せられた？

違う。

わかってる。

統矢が私を愛人にしてもいいと思った理由。

同情、罪悪感、励まし・・・

それだけとおきたいけど、違うだろう。

最大の理由はビジネス。

間宮財閥は、ヤクザとも繋がりがある。

どうしても表立って出来ない仕事はヤクザに・・・主に廣野組に回している。

莫大な謝礼を払って。

統矢からすれば、私のお爺ちゃんは大きな取引相手の社長だ。その社長からの頼みを無碍には断れない。

だから私の面倒を見る。

だから私を立ち直させる。

全ては廣野組のためだ。

同情もあるだろう。

罪悪感もあるだろう。

励ましたい気持ちもあるだろう。

だけど統矢はそんなことだけで、適当な愛人は作らない。

間宮財閥の娘という肩書きが私にあるからこそ、愛人にするのだ。

だから、お爺ちゃんの話聞いたとき、私は嫌な予感がした。

心のどこかで、きっと統矢はお爺ちゃんに乘せられた振りをして、私を愛人にするだろうと思った。

軽い屈辱感を覚えた。

でも……

それならいつそのことそれを利用しよう。

私が間宮財閥の娘ならば、

期限が1年と決まっているならば、

統矢は私を決して粗末には扱えない。

ユウさんは、これから何十年と言つ長い時間、統矢と一緒に過ごせる。

しかも統矢の子供も一緒に……。

だけど私にはそれは叶わない。

ユウさん、ごめんなさい。

1年後、私はまた少し泣いたら、今度こそ一人でちゃんと立ち直ります。

だから・・・

1年だけ私のワガママを許してください。

1年だけ私を思い切り勝手に嫌な女にさせてください・・・

第16話

ワガママな愛人になる。

そう決めて、本当にすぐにワガママになれるなら苦労しない。

私は普通の人よりワガママだし高飛車だと思う。

それでも、やっぱり9年も想い続けていた人に対し、いきなりワガママになるのは難しい。

それに「愛人」って何をしたらいいんだろう？

そんな愛人初心者私の心中を見抜いてか、

統矢は翌日私を迎えに来て、そのまますぐにホテルへ連れて行った。

統矢は私と寝たかった訳じゃないだろう。

たぶん私がワガママを言いやすくするために、敢えて先に関係を持つてくれたのだ。

それと・・・統矢自身が覚悟をするために。

そうだとわかっていてもやっぱり嬉しかった。

「愛、もしかして初めてとか言わないよな？」

「さすがにそれはないわよ。統矢にするなって言われてたら、今までしなかったけど」

統矢はニヤリと笑った。

「それはもったいないことをしたな。愛がまだ子供の頃にそう言うておけばよかった」

お互いの緊張を解くためにわざとそんな軽口を叩いてから、統矢は私を優しく抱いた。

せっかく統矢が気を使ってくれたのだ。
クヨクヨしてたら時間がもったいない。

私は思う存分この1年を満喫することにした。

統矢もできる限り私の都合に合わせてくれた。
私のとんでもないワガママもいくらでも聞いてくれた。

イベントというイベントは全て一緒に過ごした。
お互いの誕生日はもちろん、ユウさんの誕生日にも統矢を帰らせなかった。

家族にとって大事な日こそ、この1年は私と一緒にいてほしかった。
私の未来に、統矢との家庭はないのだから・・・
そんな嫉妬からのワガママ。
でも統矢は文句の一つも言わなかった。

そんな統矢もさすがに子供が生まれた日だけは、会いに行かせてくれ、と私に頼んだ。

だけど私は許さなかった。

子供の顔なんてこれからいくらでも見れるじゃない。

誕生日だって来年も再来年もその次もずっと祝えるじゃない。

今は私のところにいてよ！

でもさすがに、私もこれは反省した。

統矢とユウさんに申し訳ないと思ったというより、子供がかわいそ

うだと思った。

だから翌日は、グツと我慢して統矢に病院に行ってもらった。

その夜、統矢は私のところにきくれたけど、とても機嫌がよかった。それが癪に障って仕方なかった。

それ以来、私はますます統矢を家族から離そうとした。

統矢は家で、子供のイベント事もできなかったかもしれない。

でも、もう子供がかわいそうだとも思えなくなっていた。

どうせ私に会ってない時間は、家でユウさんと子供と楽しく過ごしてるんだから。

毎年あんなに心待ちにしていたクリスマスも今年ばかりは来て欲しくなかった。

いつまでもこの1年を味わっていたい・・・

少しでも長く統矢といたい・・・

でもそういう時は、時間がたつのが異常に早い。

あっという間に冬が終わり、春が過ぎて、気づけば夏を越えて秋になっていた。

11月に入った頃には、毎日が、いや、毎時間がカウントダウンのようだった。

もう終わってしまう。

もう統矢に会えなくなる。

そしてついにその日は来た。

23歳のクリスマスイブ。

12月に入ってから、統矢と毎晩一緒にすごしていた。

統矢は決して私のマンションには来ようとしなかったから、いつもホテルだ。

しかもかなりいい部屋ばかりだから、ホテル代も馬鹿にならないだろう。

もちろん統矢は気にもしてないけど。

24日は昼前に二人して起き出した。

まるでお通夜のような顔をしている、と統矢に笑われた。

でも理由がわかっているので、統矢もあまりつつこんではなかった。

「明日で最後ね」

「・・・そうだな」

「今日のパーティは一緒に行ってくれるの？ユウさんは来ないの？」

統矢の顔が一瞬曇る。

「ユウは・・・来ないよ」

そうか、子供も小さいし、無理して出るようなパーティじゃないしね。

「今日の夜は、一緒にいてね。明日の夜まで・・・」

「ああ、わかってる。クリスマスまでの約束だったからな」

「ええ」

それから統矢は何かを思い出したのか、ハツとした顔になった。

「愛、悪い。俺今から一度家に戻る」

「・・・え？今日も一緒にいてくれるんじゃないの？」

「悪いな。パーティでまた合流しよう」

「・・・そうね、私も準備しないといけないし」

「後で」

「わかったわ」

どうしたんだろう？随分と慌ててるみたいだけど。

まあ、せいぜいユウさんと何か約束でもあったのだろう。

今は1秒たりとも統矢をユウさんのところに帰すのはイヤだけど、統矢の慌てた様子に思わず帰ってしまった。

だけど、統矢はいつも通りパーティに来て、約束通りそのまま私と一緒にまたホテルへ行ってくれた。

ずっと夢だった、統矢とのクリスマスイブ。

でも、嬉しさより悲しさの方が大きい。

中学2年のクリスマスイブに統矢に「お嫁さんにして」と言ったときは、

まさかこんなに悲しい思いをすることになるなんて思ってもみなかった。

いつそ、昔の私に、辛い恋になるからやめなさい、と言ってあげたい。

でも・・・

たとえこれだけ悲しい思いをするとわかっていても、私はやっぱり統矢に恋しただろう。

この楽しかった夢のような1年のためなら、何年でも片思いしただろう。

その1年も明日で最後。

明後日から私は何を糧に生きていこう？

イブの夜もやつぱり瞬く間に過ぎていった。

でもそのほとんどを私は泣いていた。

統矢も眠ることなく、そんな私につきあってくれた。

クリスマスの朝、私はデパートに統矢を連れて行き、最後のプレゼントをねだった。

この1年間で、私は統矢にたくさんのプレゼントをもらった。正確に言くと、私がねだったものは何でも買ってくれた。

だけど、まだどうしても欲しいものを貰ってない。

「指輪？」

「ええ。指輪ならなんでもいいの。安くていいの」

だから宝石専門店なんかには行かず、デパートに来た。

しかもデパートの1階。

お手軽に買える安い指輪がたくさん並んでいる。

イミテーションの小さな石が光る、9千円ほどの指輪を私は手に取った。

「・・・ダメだ」

「お願い」

「ユウにも指輪なんてあげたことないんだ。だからダメだ」

「・・・どうしても？」
「どうしても」

統矢がここまでキツパリと私のワガママを断るのは初めてだった。
やっぱり、ユウさんにはかなわないんだな・・・

「その代わり、他のものならなんでも買ってやるから」
「どんなに高くても？」
「ああ」

私はあてつけのように、本当に高いダイヤのネックレスをねだった。
さすがにこんなに高い物は無理、と統矢に言わせたかった。
それなのに・・・

統矢はその場で、しかも現金で、それを買ってしまった。

「統矢、先に帰って」
「・・・いいのか？」
「もう大丈夫だから・・・クリスマスでしょ。ユウさんと子供さんのところに行つてあげて」
「・・・」

ネックレスを買ってもらった後は、またホテルで過ごした。
1秒1秒が苦しかった。
いつそのこと早くこの時間が終わったほうが楽になれるかもしれない、と思った。

それでも統矢を手放せなかった。

けど・・・
もう8時。

いい加減終わりにしなきゃ。

統矢は私を抱きしめて軽くキスをした。
初めてキスしてくれたときのように。

「じゃあな」

「・・・さよなら」

「・・・ああ」

そして統矢は出て行った。

私は1年前の夜と同じように、ひたすら泣き続けた。

この時、私は統矢が出て行った扉を見つめていた。

もしかしたらまたあの扉が開いて統矢が戻ってきてくれるかもしれない。

もちろん、そんなことはなかったけど。

でも、統矢は・・・

統矢はクリスマスイブに、ユウさんから「明日の朝出て行く」と聞かされていた。

それなのに、イブの夜もクリスマスもずっと私と一緒にいてくれた。

統矢はユウさんを最後、見送ることもできなかったんだ・・・

第17話

雨だ。

本降りになりそうだな・・・

そういえば、幸太と初めて会ったときも雨が降っていた。

あの時はまさかこんなに幸太のことを好きになるなんて夢にも思わなかった。

私はリビングの床に座り込み、
雨で冷たくなった窓ガラスに頭を預けた。

3日前。

統矢が私を愛人にした理由を、
その1年間のことを、

話し終えたとき、意外にも幸太は笑顔だった。
しかも、満面の笑み、と言っているだろう。

「どうして笑ってるのよ？」

「いや、だってさ。愛には悪いんだけど、統矢さんはちゃんと理由があって浮気してたんだってわかって、

安心した。やっぱり統矢さんは統矢さんだ。変わってなかったんだ。
てゆーか、その割り切り方がいかにも統矢さんらしい」

「・・・そうね」

なんだか気が抜けた。

「ねえ、私のことは？」

「愛のこと？」

「嫌な女だと思わないの？」

「なんで？別に思わないけど？もし昔、嫌な女だったとしても、今は違うから俺には関係ないし」

「関係ない、って・・・」

思わず笑ってしまった。

せっかく覚悟して話したのに・・・全く、もう。

「愛、悪いんだけど、俺、今日は帰るわ」

「え？あ、そうね。その方がいいわ。統矢とちゃんと話してね」

「うん。ありがとう！」

幸太は私をギュッと抱きしめると、すごい勢いで飛び出していった。

その翌日。

前日とは別人のように幸太はニコニコしていた。

「よく考えたら、俺、大学受かったんだよな！。しかもH大！よく頑張ったな、俺！」

「・・・何、自画自賛してるのよ」

「いいだろ、4月からまた司法試験に向けて勉強しないといけないし」

「そうね。昨日は統矢と話せたの？」

幸太が一瞬詰まる。

え？何？

「・・・話せたとゆーか、話せなかったとゆーか・・・そこまでたどり着かなかったとゆーか・・・」

「どういう意味？」

「・・・昨日、統矢さんに謝ろうと思って、統矢さんの部屋行つてさ。」

話は聞きました、誤解しててすみませんでした、って言おうと思つたんだけど、

『聞きましたって、誰から聞いたんだ』って言われるに決まってるだろ？」

・・・ああ、物凄く嫌な予感。

「だから、思い切つて、先に愛のこと話したんだ。そしたら・・・」
「そしたら？」

「『お前は、組長の元愛人とききあつてるのか！どーゆー神経してるんだ。てゆーか、

それってありなのか？いいのか？』って散々呆れられて馬鹿にされて・・・」

「されて？」

「結局そのまま俺の合格祝いも兼ねて統矢さんと飲んで・・・」

「飲んで？」

「すげー盛り上がったよ、愛の話で」

「・・・」

「色々聞かせてもらえたし」

色々！？何を！？何を話したの、統矢！？

真っ赤になっている私に怯えたのか、幸太が一生懸命弁解する。

「と、とにかく愛のお陰で、久々に統矢さんと楽しめたしさ。ありがとう……」

……まあ、元と言えば私がまいた種だ。

これくらいで二人が和解するなら御の字じゃない。

でも……統矢は一体、私の何を話したんだろう……

ああ、知りたいような、知りたくないような……

一人であれか、これが、と悩む私を見て、幸太はお腹を抱えて笑った。

あの日は、本当にホツとしたな。

幸太が廣野組をやめるようになったらどうしようって本気で心配したから。

笑い話で終われてよかった。

時計を見る。

午後6時。

今日も幸太は来るって言ってた。

でも……

どうしよう。

どんな顔して会えばいいんだろう。

私は両手で両膝を抱え込んだ。

そのとき、ガチャガチャと玄関の鍵を開ける音がした。

「あれ？愛、もう会社終わったの？ビックリした」

「・・・今日は酔っ払ってないのね」

「・・・ごめんって」

昨日の夜、友達と飲みすぎた勢いで私の家に来た幸太は、
散々吐いた挙句、トイレで寝てしまったのだ。
今朝は私のご機嫌取りで必死だった。

「もうあんなことしないって」

「・・・」

あんなこと・・・

あんなことがこれから何回あってもいい。
むしろあつてほしい。

「愛？まだ怒ってる？・・・悪かったって」

「違うの」

「え？」

ダメだ・・・幸太の方を見れない。
私は床に視線を落とした。

「愛？」

「・・・妊娠したの」

幸太がハツとするのがわかった。

「・・・俺の子？」

そうならこんなに悩まない。

「今、3ヶ月だつて」

「3ヶ月・・・じゃあ・・・」

私は顔を両手で覆った。

第18話

どうして？

どうして、今なの？

幸太に会う前だったら、私はきっと物凄く喜んでいただろう。

統矢と家庭を持つことができないのはわかっていたけど、

統矢の子なら、一人で産んで一人で育てることになんの迷いもなかった。

実際、統矢と付き合っているとき、妊娠を期待したこともあった。

もし妊娠したら、愛人という立場は変わらなくても、統矢を繋ぎとめておけるかもしれない、

そんなズルイ計算も少しあった。

でも統矢が気をつけていたので、妊娠できなかった。

それなのに、どうして今になって・・・

あんなに好きだった統矢の子だ。

正直、今でも産みたい気持ちもある。

でも、それは同時に幸太との別れを意味する。

今の私に、幸太と別れてまでこの子を産む勇氣があるだろうか。

「今日、会社で貧血起こして倒れたの。それで病院に行ってわかったの・・・」

「うん」

「だから・・・私もさっき知ったところで、まだ気持ちの整理がつかない」

いてないの・・・

悪いけど、今日は一人にしてくれないかな・・・」

「うん、わかった」

そう言うと、幸太は家から出て行った。

幸太に、まだ18歳で、しかも統矢の弟分の幸太に、何を期待して
たんだろう。

私は幸太が出て行った扉を見つめた。

去年のクリスマス、統矢が出て行った二度と開かない扉を見つめて
いた時のように。

そして・・・

きつとこの扉もまた、二度と開かないのだろう。

妊娠がわかって3日が経った。

産むか産まないか、悩みに悩むだろう、

そう思っていたけど、正直、あまりそのことは考えなかった。

それよりも私の頭は他のことでいっぱいだった。

この3日間、幸太から全く連絡がない。

幸太が出て行ったとき、もうこれで終わりだろうと覚悟してたけど、
もしかしたら、という気持ちもあった。

だけど、電話もメールも何もない。
こんなこと、初めてだ。

もう本当に連絡してこないのかもしれない。

3日間、私は泣き暮らしていた訳ではない。

普通に朝起きて、ご飯を食べ、会社に行き、帰ってきて、お風呂に入ってまた眠る。

仕事だっていつも通りきちんできた。

一昨年や去年のクリスマスの失恋の時は、とにかく泣きまくっていた。
た。

もう死んでしまいたいと思った。

でも今は違う。

涙は出てこない。

だけど・・・

何をしても実感がない。
フワフワした感じ。

何を食べても美味しくないし、仕事がうまくいっても嬉しくない。
朝起きててもスッキリしないし、夜も眠たいと思わない。

これって・・・

生きてるって言うのかな？

死にながらに生きているような・・・

身体は動いてるけど、私の心は完全に死んでいた。

ダメだ。

こんな状態じゃ、とてもじゃないけど子供なんて産めないし育てら

れない。

かわいいと思えない。

自然と答えは出ていた。

子供はおろそつ。

そうすれば、もしかしたら幸太も戻ってきてくれるかもしれない。
たぶん無理だろうけど可能性はゼロじゃない。

私は会社を早退して病院へ行つた。

「もう3ヶ月ですからね。できるだけ早い方がいいでしょう」

「・・・はい」

「明々後日に手術します。明後日、お仕事が終わったら一度きてください。前処理をします。」

明々後日は会社をお休みしてくださいね。その次の日からは普通に
出社できますから」

「・・・はい、よろしく願います」

家に帰り、お風呂に入った。

・・・喉が渴いたな。

そう思い、冷蔵庫を開ける。

中にはミネラルウォーターと麦茶、それとビールがあつた。
ミネラルウォーターを取り出しかけて手を止める。

そつだ。子供はおろすんだ。別にお酒を飲んだっていいじゃない。

ミネラルウォーターはしまって、代わりにビールを出し、プルツプを引く。

私はどちらかと言うと、発泡酒の方が好きなんだけどな。ビールは苦い。

でも幸太はいつちよまえにビールしか飲まないから、うちの冷蔵庫もいつの間にかビールだけになった。

そう言えば、統矢もビール専門だったな。

幸太のビール好きも統矢の影響だろう。

幸太はほんと、統矢のことが好きなんだなあ。って、私もそうだったんだけど。

コンロにもたれかかってビールを一口飲む。

苦い。

ほら、やっぱり苦いじゃない。

いつの間にか、視界がぼやけていた。

幸太と一緒にいたらこんな苦いビールも飲めたのに・・・
一人じゃとても飲めないよ・・・

ガチャガチャ

え？

何！？

玄関で鍵を開ける音がした。
私は缶を落としそうになるほど驚いた。

——泥棒！？

冷静に考えれば、こんなセキュリティのしっかりしたマンションに、しかも暗くなる前に玄関から堂々と泥棒が入ってくる訳がない。

もしかして、幸太かも、とは少しも思わなかった。
だってもう来てくれないと思ってたから。
だから泥棒だと思った。

だから・・・

「愛ー？帰ってる？って、うわ！何、妊婦のくせに酒なんか飲んでるの！？」

「・・・」

「まったく、ネエちゃんじゃあるまいし」

「・・・」

「ネエちゃんさ、前の組長の葬式るとき、妊娠してるのに酒を一気飲みしてぶっ倒れたんだよ。」

いくら偲び酒だって言っても、バカだよなー。よく無事に産めたもんだ」

「・・・幸太・・・何しに来たの？」

幸太は心底傷ついた、という顔をした。

「え？俺、来ちゃダメ？」

「そうじゃなくって・・・」

「愛ってさ、手取りいくら？」

「は？」

「会社の給料。手取りでいくら？」

「・・・25万くらい」

「このマンションは持家なんだよな？家賃でないんだよな？」

「・・・うん」

「俺の学費と、司法試験のための専門学校の費用は今までどおり統矢さんが出してくれるから・・・」

うん、なんとかなるな」

「・・・何が？」

一人で勝手に話して、一人で勝手に納得してる幸太。
一体何を言っているんだろう・・・？
ていうか、何しにきたんだろう・・・

「しばらくはヒモだけど、よろしく」

「ヒモって何？」

「女に面倒見てもらってる男」

知ってる。

「ヒモって誰が？」

「俺が」

「誰の？」

「愛の」

「どうして？」

「俺が廣野家出てきたから」

そう言って、背中のかなきリュックを指さした。

なるほど。

それでここに転がり込むって訳ね。

「って、何それ！？何考えてるの！？」

「あ、言つとくけど、廣野組をやめた訳じゃないから。住むところを変えるだけ。

組員への挨拶とか、大学への住所変更届けとか、色々することがあつてさー。

連絡できなくってごめんね」

なーんだ、そうだったの。

「い、いや、そういう問題じゃなくて・・・どうして！？どうしてここに住むの？」

「愛と暮らしたいなーと思って」

暮らしたいなーって・・・

「ダメ？」

「ダメ！」

「えー」

「・・・な訳ないじゃない！！！」

私は思い切り幸太に抱きつき、そのまま勢い余って二人してキッチンの床に倒れこんだ。

ビールが盛大にこぼれてしまったけど、後で掃除しよう。
一緒に。

第19話

「ママー、おま、おま」

「おま？ああ、おやま、ね」

「うん、おま」

「あれはねー、ふじさん、って言うおやまなのよ」

「ふじちゃん」

「ふふ、それでいいわ」

新幹線の窓からは、3月の澄み切った暖かな空にそびえたつ立派な富士山が見えていた。

1歳半の美優^{みゆう}は初めての新幹線と初めての富士山に大興奮だ。窓にへばりつき、鼻が潰れている。

スカートの裾からはミッキーのオムツが丸見えだ。

ふふふ

本当にかわいい。

一挙手一動、全てが愛おしい。

この子を産むのをやめようと思っていたなんて、信じられない。

幸太が転がり込んできた勢いで一緒に暮らし始めてちょうど2年。早いものだ。

最初の頃は大変だった。

いや、大変だったけど、私は大変だとは全く感じなかった。

「この人と一緒ならどんな苦勞も乗り越えて行けるわ」という、乙女チックな気持ちも多少あったけど、それだけでは現実の苦勞は減らない。

現実の苦勞を減らしてくれたのは、幸太の決断力と行動力だった。それはもう、高校を卒業したての18歳とは思えないほど。

これも統矢譲りなのか、生まれつきなのか・・・

「統矢にはなんて言おう・・・」

「あ、俺もう言っちゃった」

「ええ！？なんて？」

「愛が俺の子を妊娠したから一緒に暮らしますって」

「・・・」

「今更正直に、統矢さんの子なんですけど俺の子として愛と一緒に育てます、って言うても

しょうがないだろ？」

それもそうだ。

いくらユウさんが出て行ったとはいえ、統矢が私を妻にするとは思えないし、

私ももうそんな気はない。

それなら幸太の子として育てるのが統矢にとっても子供にとってもいいだろう。

でも・・・

「幸太はそれでいいの？」

「何が？」

「だって、本当は幸太の子じゃないのに・・・そこまでしてくれな

くていいのよ?」

「じゃあ、別れる?」

「・・・イヤ」

「だったらくだらないこと聞かないの」

それもそうだ。

という訳で、子供についての話は終了した。
わずか1分ほどだった。

「あと、愛の親に話さないね」

「あ」

「明日会いに行こう。ほら、電話して」

「うん・・・でも・・・」

さすがに言いづらい。怒るに決まってる。

「車で事故って人を死なせてしまいました、って報告だったらしに
くいけどさ。」

子供ができたから結婚します、なんてメデタイこと、すごく報告し
やすいじゃん」

それもそうだ。

こんなメデタイことはない。

なんだか幸太の口車に上手く乗せられて、親には簡単に報告してし
まえた。

だけど、両親もお爺ちゃんも大激怒。

どうしてよ?こんなにメデタイことなのに。
と、すっかり幸太に感化されてしまった。

一応翌日に幸太と私の実家に行ったけど、文字通り「門前払い」。家に入れてももらえなかった。

「・・・ごめんね」

「なんで？また来たらいいじゃん」

それもそうだ。

また来ればいい。

「あ、幸太の実家は？」

「結婚するときでいいよ。愛の親が許してくれるまで結婚はできないでしょ？」

「ゆーか、愛がしたくないでしょ？」

「うん・・・」

「だから、愛の親が許してくれて結婚できるようになってからでいいよ。まあ、家出してから

全然連絡取ってないし、今更報告しなくても別にいいけど」

「ダメよ。子供もできたんだし、ちゃんとご挨拶に伺わないと！」

「あはは、すっかり俺の子だね」

「あ・・・ごめん」

「なんで？それでいいじゃん」

そうだ、それでいい。

普通だったなら物凄く悩むようなことばかりなのに、幸太と一緒にとんでもないことに思えた。

幸太が言うことは何でも的を得ていて「それでいい」と思えた。

そう、実際なんでもないことなんだ。

「大変だ」って勝手に思い込んでるから、大変になってしまってるだけ。

ちょっと見方を変えれば、大変でもなんでもない。

でも、本当に「大変」なこともあった。

お金だ。

私が産休に入ると完全に収入が途絶えてしまった。

育児手当も少しは出るけど、それではとても生活できない。

当然、私の親からの援助はない。

できる金策は全てした。

まず、維持費がかかるので車を手放した。

下取り費用で多少の貯金もできた。

私がつっていたアクセサリ類もほとんど売った。

統矢からもらったダイヤのネックレスを売れば、

いつきに莫大なお金が入るけど、これは幸太が反対した。

長年の片思いのご褒美として大切にしたらいい、と言ってくれた。

買い物も外食も控えた。

大学へ行く幸太にもお弁当を毎日作った。

幸太も「バイトする」と言ってくれたけど、

それよりも勉強を頑張つて、1年でも早く司法試験に受かってくれる方が助かるので、これは私が断った。

そして何よりも助けになったのは、統矢からの祝いだった。

こんなに貰っていいのかと思うくらい包んでくれたのだ。

正直、統矢と私の今までの関係を考えると受け取っていいものか悩んだ。

でも……

統矢はたぶん、この子が自分の子だと気づいてる。

このお祝いは、父親だと名乗れない統矢がこの子にできる精一杯のことだと思い、

ありがたく受け取ることにした。

そして、9月末に美優が生まれた。

出産にしても子育てにして、ユウさんと蓮君を見てきた幸太は手馴れていた。

私が泣き止まない美優を抱いてオロオロしてても、幸太は動じることもなく、

美優が泣き止むまで楽しそうに抱っこしていた。

離乳食をあまり食べない、と私が落ち込んでいても、

幸太は「大丈夫、大丈夫」と笑いながら、根気強く美優に離乳食を与えてくれた。

それに勉強もすごく頑張っていた。

「早く、ヒモ状態を脱しないとねー」と、相変わらずの笑顔で。

そして……

それがどれくらい凄い事なのか、私にはわからないけど、幸太は2年目で見事に司法試験をパスした。

第20話

去年の11月に幸太が司法試験に合格してからは別の意味で大変だった。

私のお爺ちゃんと両親がようやく結婚を認めてくれたのだ。それでも最初は渋々、といった感じだった。

ところが・・・

純粋な本心なのか、狙っていたのか分からないけど幸太がこんなことを言い出した。

「愛って一人っ子だろ？俺でよければ、養子になるよ」

もう、この一言で間宮家はノックアウト。

特にお爺ちゃんの喜びようと言ったら・・・

私が妊娠して半勘当状態になって以来、

お爺ちゃんとしては、もう私に家を継いでもらうことは諦めていたらしい。

かわりに、大して思い入れもない親戚の誰に継がせようか・・・と悩んでいたところに、

幸太からの鶴の一声。

しかも曾孫付き。

嬉しくない訳がない。

さらに幸太は廣野組の組員ではあるけど、堀西の高校をトップで卒業し、H大に現役で合格、

19歳で司法試験に合格・・・って世間的に見ればいつの間にか

超インテリだ。

婿養子としては、文句のつけようがない。

「うわー。私ならそんな男と絶対結婚したくない」

「するんでしょ？」

そうでした。

12月6日の幸太の二十歳の誕生日も間宮家で祝った。

お酒好きのお爺ちゃんの息子とは思えないほど、お父さんは下戸だ。それに比べ、幸太は折り紙つきの酒豪。

結局朝までお爺ちゃんと幸太の二人で飲んでいた。

翌日は私の冷たい視線に二人してそっぽを向き、それぞれベッドに潜り込む始末。

その日の夜は、二日酔い（と言うのかわからないけど）の幸太と一緒に、

幸太の実家を訪れた。

14歳で家出して以来、お兄さんとはたまに連絡を取るものの、両親とは全く音信不通だったと言う。

6年ぶりの再会とあって、さすがの幸太も少々緊張気味だった。

「幸太って、本城っていう苗字だったんだね」

「そう言えば、そうだった」

「しかも・・・ご実家、弁護士事務所なのね」

「うん。俺も兄ちゃんも、親にしつこく『弁護士になって家を継げ』って言われてうんざりして

家を出たのに、俺は結局弁護士を目指しちゃってるな」

「え？お兄さんも家出したの？」

「いや、兄ちゃんは高校教師になって普通に家を出たんだ」

幸太が耐えかねて家出するなんて、一体どんなご両親なんだろう・

と、不安になりつつ門をくぐった。

でも。

なんてことはない、ごく普通の優しいご両親だった。

いかにも幸太のお父様とお母様と言う感じで、とてもいい人達だ。

「はじめまして、愛さん。幸太の父親です。すみませんね、わざわざ。」

しかもこんなバカ息子と・・・愛さんは心が広いすな」

「幸太の母です。まあ、可愛らしい方ね。しかもこの女の子・・・天使みたい！

うちは男の子二人だったから、こんなかわいい女の子、うらやましいわ」

と、ニコニコしている。

ごめんなさい・・・この子は本当はお二人とは血の繋がりはないです・・・

そうつ心の中でお詫びして、私も挨拶させてもらった。

「はじめまして。ご挨拶が遅れて申し訳ありません。間宮愛と申します。それと・・・娘の美優です」

「でしゅ」

美優も愛想よく笑う。

もうお二人ともすっかり美優の虜だ。

昔は幸太も子供だったのだろう。

反抗期と言うこともあつて我慢がきかず、家出してしまった。

しかもその時、たまたま統矢に出会い心酔してしまい、家に帰らなくなったただけだ。

「いや、昔は本当に口うるさかったんだよ。今は兄ちゃんの嫁さんが弁護士で、

家を継いでくれることになったから安心して丸くなっただけ」

なんて幸太は言うけど。

そのお兄様と言うのが・・・

「愛。見とれすぎ」

幸太にわき腹をつつかれてしまった。

だつて！！かつこいい！！

幸太もかつこいい方だとは思うけど、若いということもあり

まだまだ「かわいい男の子」の域。

でも、このお兄様は・・・もうどこをどうとっても正真正銘のイケメン！

幸太と10歳違つて言うから30歳のはずだけど、どう見ても25歳くらい。

背も180以上あるかな。

スポーツでもしていたのか、がっちりしてるけど細身で、スタイル

抜群。

眼元はお父様譲りで、幸太も含めて3人ともそっくりだ。鼻も高くてくつきりしていて……それでいて濃すぎず。

うわー、うわー……これは……乗り換えようかしら……

「はじめまして。本城真弥といいます。こっちは妻の和歌」

これまたそのない素敵な笑顔で挨拶されてしまった。そうだ。結婚されてたんだった。残念。

「和歌」と紹介された女性が幸太と私に向かって「はじめまして」と会釈する。

和歌さんは真弥さんに比べると少し地味な感じはするものの、ストレートの黒髪がとっても綺麗な知的美人という風情。弁護士としては理想的だ。

歳はたぶん私と同じくらいかな？

私も真弥さんと和歌さんに挨拶をする。

「はじめまして」

「うわ、すげー美人だな。幸太、お前にはもったいなさすぎる」

幸太が真弥さんをジロツと睨む。

「兄ちゃんだって、なんだよ、こんな若い奥さんもらって。和歌さん、騙されちゃダメだよ。」

この人、八方美人の遊び人だから」

「おい」

「ほんと、若いよね。和歌さんていくつ？」

「24歳です」

「6つも下じゃん」

「愛さんもお前より5つ上だろ。でも全然そう見えないけど」

と、またもやニツコリと私に微笑みかける。

ああ。眩しい。

でも、幸太は何やら不審そうな顔つきで呟いた。

「ちょっと待つて。6歳差って・・・和歌さんてもしかして・・・」
「うっ」

真弥さんが気まずそうに頭を掻く。

和歌さんもちよつと赤くなつて下を向く。

え？何？

「兄ちゃん、和歌さんて兄ちゃんの教え子？」

「・・・」

「うわー！最低！！信じらんねー！！！」

ええ！？なんてドラマチック！！！！

というか、組長の元愛人に手を出した幸太に「信じらんねー」とは言われたくないと思うけど？

そんな兄弟のやりとりと、美優の存在のお陰で、6年ぶりの再会はとても和やかなものになった。

なんだかんだ言っても家族なんだ。
そう簡単に離れたりしない。

幸太と私は12月24日に入籍して、家族だけで式もあげた。

「ごめんね」

「何が？」

「相手が私じゃなければ、幸太は絶対統矢を呼んでたよね」

「んー。たぶん呼んでない」

「どうして？」

「統矢さんてさ、こういう形式染みたこと嫌いだから。」

『おめでとぅ』って言うってもらえただけでじゅっぶん」

クリスマスパーティーの時の統矢を思い浮かべる。

・・・確かに、こういうのは苦手そうだ。

統矢と初めて会った13歳のクリスマスイブ。

それからの10年間、私の人生は統矢のためだけにあった。

そして25歳のクリスマスイブ。

私は2度目の恋を实らせ、

幸太と、そして美優と一緒に新しい人生をスタートさせた。

これからの人生は、幸太と美優のため、そして自分のために過ごしていこう。

第21話

「・・・すごいわね」

「わね」

「真似しないでよ、美優」

「ぶっ」

私は目の前にそびえたつ、たくさんの団地を呆然と見渡した。

住所は確かにあっている。

部屋番号は、

5-C棟 102号室。

さあ、それが5-C棟だ？

こついう密集型の団地を訪れるのは初めてだ。

目当ての棟をどうやって探せばいいのか検討もつかない。

102号室ということは、おそらく1階の部屋なんだろうけど・・・しかたない、手当たり次第にそれぞれの棟の「102号室」を訪ねよう。

まだ3月とはいえ、昼間は温か過ぎるくらいだ。

もうちょっと薄着でくればよかった・・・

少し後悔しながらも、すでに11キロもある美優を抱っこし、私は無暗やたらに歩き始めた。

結婚式の日、私は本当に幸せだった。

私の家族にも幸太の家族にも祝福され、私の隣には幸太がいて、その腕の中には美優がいる。

幸太に笑われるほど私は泣いた。

こんなにも温かい涙は初めてだった。

でもそれと同時に湧き上がる罪悪感。

私は、私のワガママのせいで統矢とユウさん、それに蓮君からこんな幸せを奪ってしまった。

自分が味わって初めてわかる幸せの重さ。

それと同じ重さの罪。

幸太は私が訊ねればユウさんの話をたくさんしてくれた。

でも、あの１年間、ユウさんがどういう風に過ごしていたのかはあまり話してくれなかった。

だけど美優が生まれてから、私はユウさんが一体どんな気持ちで蓮君と一緒にあの１年を過ごしてたのか、

どうしても知りたくなり何回も幸太に話してほしいとねだった。

そして、幸太も少しずつ話してくれるようになった。

統矢と私の関係は、ユウさんの出産の２ヶ月ほど前から始まった。

だからユウさんは一人で子供を産み、狭い部屋で一人で育てていた。籍は統矢の誕生日に入れるはずだったけど、私が統矢と一緒にいたから、できなかった。

そして結局二人はそのまま入籍しなかった。

ユウさんの二十歳の誕生日も私が統矢を帰さなかったため、幸太と

一緒に祝った。

蓮君のお宮参りや初節句は・・・

蓮君は廣野組の跡取りだ、本来ならそういう行事はかなり本格的に行うべきなのに、

統矢がしようとしなかったので、いつもユウさんと幸太の二人で簡単に行っていた。

月日が経つにつれ、ユウさんと蓮君は組の中でも肩身が狭くなっていった。

それでもユウさんは統矢や私を悪く言うことなく、ひたすら統矢を信じて待っていた。

そんなユウさんを見かねて、統矢の側近の一人が統矢に意見した。その時弾みで、その側近が統矢を殴ってしまい、彼は組を追われた。ユウさんは彼に絶大な信頼を寄せていたため、彼がいなくなったのはユウさんにとって、かなりショックだったようだ。

そしてユウさんはクリスマスの朝に、廣野家を出て行った。

ユウさんも幸太も、統矢と私の関係がクリスマスまでのものと知らなかった。

でも、もし知っていたとしても、ユウさんは出て行ったのではないか、と思えた。

そんなにも・・・

私はそんなにもユウさんを追い詰めてしまっていたのだ。

そして幸せを奪ってしまった。

それなのに、今私は幸せすぎて涙が止まらない。

私ってなんて自分勝手な人間なんだろう・・・

そう思うといてもたつてもいられなかった。

—— ユウさんと蓮君を探そう。

そして謝ろう。

そして・・・

統矢のところに戻るように頼もう。

統矢は今でもユウさんのことが好きだ。

それはわかっている。

なぜなら・・・

幸太の司法試験合格祝いに、11月末に統矢と幸太と一緒に酒盛りをしたらしい。

その時に、幸太は初めて統矢から、あの1年間どうしてユウさんに冷たくしていたのか聞いた。

それは・・・

申し訳なくてユウさんの顔が見れなかったそうだ。

外で他の女を抱いている手で、ユウさんや蓮君を触れなかったというのだ。

「統矢さんて、変なところで純粹だよな」

と幸太は笑っていた。

「でも統矢さんらしい」

うん。私もそう思う。

統矢にはそういう不器用なところがある。

そこが統矢のいいところだ。

ユウさんも、たぶん・・・たぶん統矢のことを忘れていないはずだ。
私のせいで遅くなってしまったけど、もう一度3人で幸せになってほしい。

私は教会で幸太との永遠の愛を誓うと同時に、そう心に決めた。

それから私はすぐに興信所を使って、二人の居場所を探し始めた。
美優が1歳になって、私も復職したため、お金も少し余裕ができていた。

手がかりは、

「岩城結子 22歳 3月31日で23歳、 岩城蓮 2歳 2月1日で3歳」

ということだけ。

これだけで見つかるのかな、と思ったけど、さすがプロ。
2ヶ月ほどで、二人の住む家の住所を調べあげてくれた。
東京から新幹線と電車で2時間くらいの片田舎だ。

本当ならすぐにも飛んでいきたかったけど、

全ては幸太には内緒だ。

だって、ユウさんが出て行ったことは私の責任で、幸太には何も関係ない。

それに、ユウさんが戻ってきてくれれば、幸太もこれからいくらだつてユウさんに会える。

だから今は一人で会いに行きたかった。

そういう訳で、幸太が丸1日いない日を狙っていたのだけど・・・司法試験に受かり、この4月から始まる司法修習まではごく普通の大学生である幸太は、大学に行く以外はほとんど家で美優とゴロゴロしていた。つかの間の休息ってやつだ。

一方私は仕事がある。

だから、なかなか、今日こそは！という日がなかった。

それが、幸太が昨日から友達と一泊の温泉旅行に出かけた！

昨日は私も仕事があつたけど今日は日曜で休みだ。

幸太も今日は遅くまで帰ってこない。

ちなみに幸太の「友達」というのは、大学の友達ではなく、廣野組の友達だ。

廣野組では今までダントツで最年少だった幸太だけど、高校を卒業した頃から、組にチラホラと同世代の子が入ってきた。それがとても嬉しいらしく、すっかり仲良しになり、たまにうちに連れてきたりもする。

美優の教育にいいかどうかは別として・・・

とにかく、そういうヤクザ友達と一泊の温泉旅行、って・・・それって絶対連れ込み旅館とかでしょ！？

まあ、幸太もヤクザな訳だし、これから女は私一人とは限らないかも・・・

なんてヤクザの女房らしく心が広くなった今日この頃。

幸太は「そんなところに行くんじゃない！俺は絶対浮気したりしない！」と

胸を張ってるけど、いかんせん統矢仕込みの幸太だ。
そういう点では全く信用ならない。
この私が言うのだから間違いない。

まあ、そんな話は置いておいて、
今日はまさに絶好のチャンス！
と、ばかりに私は美優と新幹線に乗り込んだ。

・・・で、この始末だ。

5 - C 棟さーん、
どこですかー？

第22話

もう6件目の「102号室」
でもやっぱり空振り。

というか、今まで訪ねた6件のうち、在宅は1件のみ。
他の5件にユウさんが住んでいる可能性もある。

てことは、また後でさっきの5件も回り直さないといけないということ？

ああ・・・気が遠くなりそう。

防犯上の理由だと思うけど、表札も出ていない。
さらに昼間なのに人もおらず訊ねることもできない。

あ。

さっき在宅していた「102号室」さんに5・C棟の場所を聞けば
よかった！

戻ろっかな・・・でも怪しい人だと思われなかな・・・もう出か
けるかもしれないし・・・

やっぱり地道にいこう。

そう思い、6件目の「102号室」を後にしようとしたとき、
後ろから子供の声がした。

まさか！と思って振り返ると、私と同じ歳くらいの女性が小さな男
の子と女の子を連れて
こっちに向かってきた。

なんだ・・・ユウさんかと思ったけど違った。

でも、この人に5-C棟の場所を聞いてみよう！

その女性は隣の103号室に入ろうとした。

私はタイミングを見計らって、「すみません」と声をかけようとして・・・

固まった。

この男の子！！

一言で表現するなら、「プチ統矢」！！

似ている。

ものすごく似ている。

私の怪しげな視線に気づいたのか、女性の方から声をかけてきた。

「何かご用？」

「あ、あの私、5-C棟を探してるんですけど・・・」

「ここが5-C棟だけど」

「！！！！じゃあ、ここ、この102号室って岩城さんのお宅ですか？」

「そうよ。岩城さんに用事があるの？今、お留守よ」

やった！

やっと見つけた！！

そして、この子はやっぱり・・・

「蓮君？」

私は男の子の方を見て、聞いた。
その男の子は、誰？この人？と言う顔をしながらも、

「うん。僕、岩城蓮だよ」

と、答えてくれた！

私は・・・何故かわからないけど、いつの間にか涙ぐんでいた。

この子が蓮君・・・

統矢とユウさんの子供・・・

私がとんでもない迷惑をかけてしまった子供・・・

そんな私を見て、女性が訝しげに訊ねた。

「あなた、もしかして『愛人さん』？」

「え？」

「あ、違ったらごめんなさいね」

愛人さん・・・

「いえ、そうです。間違ってます」

「そう」

その女性はそう言うと、私を繁々と見つめた。

軽蔑するでもなく、非難するでもなく、ごく普通に見つめた。

恐らくユウさんは、この活発でさっぱりした印象の女性と仲がいいのだろう。

そして、ヤクザ云々ということまで説明しているかはわからないけど、

「夫が愛人を作ったから別れた」くらいのことは話しているようだ。

「岩城さんは、昼間はお仕事しているから夕方まで帰らないよ。

今日は私は休みだから、蓮を預かってるの」

「そうなんですか」

「よかったら、うちに上がらない？」

「え？」

思わぬ申し入れに目を丸くする。

「あなたはともかく、そのお嬢ちゃん、随分疲れてるみたいだし」

「・・・」

確かに。

美優は私の腕の中で、こっくりこっくりと船を漕いでいた。

「・・・いいんですか？」

「どうぞ。冗談抜きで狭いけど」

本当に冗談抜きで狭かった。

全部屋あわせてもうちのマンションのリビングくらい。

しかもその中に所狭しとおもちゃや服が広がっているので、文字通り足の踏み場もない。

「適当に座って」

「は、はい」

私はかろうじて座れるスペースを見つけ、腰を下ろす。

確かに狭いし、ちらかつてる。

でも、ゴミとかホコリは落ちてないし、崩れてくるような荷物の積み方はしていない。

子供に危ないものは全て子供の目につかない所に置かれている。

うちなんて、私がちょっと気を抜けば、すぐにホコリとかが溜まっちゃうのに・・・

いくら見た目が立派なマンションでも、本当に立派かどうかはこういうところで決まるのかもしれない。

私は安心して、美優を畳の上においた。

そのまま寝てしまっかな、と思ったけど、おもちゃの山が目に入ったらしく、

すっかり覚醒して山の中にダイブしに行ってしまった。

「どうぞ」

「あ、すみません。ありがとうございます」

女性がお茶を出してくれた。美優用に少し温めたミルクも一緒に出してくれる。

ありがたい・・・。

「私は山尾佳奈。そっちが娘のサナで・・・蓮のことは知ってるの？」

「いえ、名前だけしか知らなかったんですけど、蓮君の父親とあまりにそっくりなんで、すぐにわかりました」

「そっか」

「あ。私は間宮愛です。娘は美優といいます」

「結婚したの？例の彼と」

「いえ、私も彼とは別れました。今は別の人と結婚しています」

山尾さんは、相変わらず私のことを軽蔑する様子もない。
なんとなく信頼できる気がする。

山尾さんは、またじーっと私を見つめ、口を開いた。

「間宮さん、今幸せ？」

「え？は、はい。幸せです」

なんだか申し訳ない気持ちになる。

「そう。よかったわ。でもね、結子はもっと幸せだよ」

「・・・それって、結婚された、ってことですか？」

「違う違う。結子は口に出して言わないけど、たぶんまだ蓮の父親のことが好きよ。」

だから他の人と結婚はしないと思う」

やっぱり！

じゃあ、ぜひ戻ってきてもらおう！

「でも、結子は今とっても幸せだよ」

「え？」

「証拠もあるし」

「証拠？」

「そう。あれ」

そう言って、山尾さんは視線を窓際に移す。

そこには、美優と遊んでくれている連君とサナちゃんがいた。

私は山尾さんの言っている意味がわからず、しばらく連君とサナちゃんを見ていた。

・・・

なんだろう。

二人が物凄く輝いて見える。

お世辞にも着ている服はいい物とは言えない。

何回も何回も洗っているのだろう、ヨレヨレだし、シミだらけだ。遊んでいるおもちゃもかなり年季が入っていて、誰かのお下がりのようだ。

だけど、二人の目はキラキラと輝いている。

毎日が楽しくって仕方がない！！！！

そんなオーラが体中から溢れている。

「二人とも楽しそうでしょ？」

「はい・・・」

「親が幸せじゃないと、子供はああはならないよ」

「・・・」

「私も結子もシングルマザーだけどさ、今、とっても幸せ」

「・・・」

「子供達もね」

なんだか胸のつかえがスツとなくなった気がした。

ユウさんは幸せなんだ・・・

本当に幸せなんだ・・・

それをこの蓮君が証明してくれている。

私はユウさんと蓮君に謝りに来た。

二人を連れ戻しに来た。

それは二人が今、幸せじゃないと思っていたから。

でも、そうじゃなかった。

二人は今、幸せなんだ。

「山尾さん、ありがとうございます。私、帰ります」

「うん」

「本当に、ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

山尾さんはニツコリと微笑んだ。

私が美優に、帰るわよと言うと、蓮君とサナちゃんから大ブーイングが来た。

「えー！もつと一緒に遊びたい！！」

「蓮、ワガママ言わないの」

「だってー。赤ちゃん、かわいいもん」

「あんたもじゅぶん赤ちゃんだよ」

「違うー！僕、もう3歳だもん！」

「サナももう3歳だもん！」

「そうだね、もう3歳だもんね。じゃあ、お菓子は我慢しようか」
「ヤダー！！！！！」

「じゃあ、ちゃんと美優ちゃんと美優ちゃんママにバイバイなさい」

「バイバーイ！」

うわ。さっぱりしてるな。

お菓子の威力はすごい。

私は何度も何度も山尾さんにお礼を言いつつ、山尾家を去った。

もう私がユウさんに会う必要はない。

むしろ会わない方がいい。

私は、すっかり眠ってしまった美優をギュッと抱き締め、歩き出した。

第23話

東京駅につくと、私は眠ったままの美優を抱き直し、タクシーを拾った。

家に帰るだけなら電車でじゅうぶんだけど、その前に寄るべきところがある。

私は勘違いしていたようだ。

私が心配すべきはユウさんではない。

私が心配すべきなのは・・・

廣野家は久しぶりだ。

いや、中には入ったことはない。

統矢とつきあっている時もここには近づいたこともない。ただ幸太が高校生のとき、この近くまで送っていたので、遠目には何度も見たことはある。

タクシーの運転手は気味悪そうに私と美優を門の前で降ろし、さっさと去っていった。

・・・それにしても、近くで見ると凄い。まずこの広さ。

私の実家もたいしたものだと思うけど、比べ物にならない。ここにはかつての幸太のように住んでいるヤクザが50人近くいるという。

それにしても広い。

軽く100人以上は住めるだろう。
まさに「お屋敷」という感じだ。

更に、この鉄の黒門。

そりゃいつ攻め込まれるかもしれない世界だ。
セキュリティにも気を使っだろう。

この門なら散弾銃を打ち込まれても平気だ。

その門の前に、見張りとおぼしき若いヤクザ達が5人ほどいた。
統矢や幸太とは違い、「いかにもヤクザ」という強面の人たちだ。
でも、統矢とつきあっていた頃は、この手の人がいつも統矢と私の
近くにいた。

それに、幸太もたまにヤクザ友達を家につれてくる。

だから私もすっかりヤクザ慣れしてしまい、この程度の若いヤクザ
なんて、

かわいい坊ちゃんもいいところだ。

「すみません。組長に用事があるんですけど」
「何？」

「組長の廣野統矢に会いたいんです」

「あんた、何モンだ」

組長の元愛人です。

いや、ダメか。

下手したらつまみ出されそうだ。

「えーと、間宮幸太の妻です」

「まみやこうた？」

あれ、知らないのかな。いい加減古株だと思っただけ。
それとも、「間宮幸太」じゃわからないのかな。
結婚したばかりだし。

「ええつと、本城幸太の妻です」

「ほんじょうこうた？」

「・・・」

そう言えば、統矢は幸太のことをこう呼んだ。

「コータ、の、妻です」

「・・・」

あれ？ダメ？

「コ、コータさんの奥様・・・！？」

「はあ。それと娘です」

「し、失礼しました！！！」

「・・・」

どうやらこの門番達は幸太より下っ端らしい。

私はうつてかわって、丁重な扱いで中に案内された。

このお屋敷、外も凄いいけど、中も凄い。

門から一足踏み込むと、そこには見事な日本庭園が広がっていた。
その辺のちよつとした公園なんて目じゃない。

小池には橋がかかっていて、美優の遊び場には最適だな・・・
なんて思う。

あの元気な蓮君が頭に浮かぶ。

あの子が今ここに住んでいたら、毎日のようにこのお庭を駆け回っていたことだろう。

ただし、そこにサナちゃんはいない。

あの二人の仲の良さを考えても、やはり蓮君はここを出てよかったのかもしれない。

うちの全部屋がすっぱり入りそうなくらい大きな玄関ホールを抜け、先が見えないくらい長い廊下を進む。

廊下の左側は先ほどの庭に出れるようになっており、右側は延々と襖が続いている。

一番奥まで来たところで、ようやく襖の中へ通される。

・・・予想はしていたけど、今ずーっと歩いてきた廊下に平行して、これまたずーっと畳の間が広がっていた。

一体何畳あるんだろう・・・数えているだけで日が暮れそうだ。

「ここでお待ちください。組長を呼んできます」

「・・・はあ」

その時、ちょうど美優が目を覚ました。

「ママ？」

「あ、おはよう。起きちゃった？」

美優はしきりに辺りを見回した。

「おつり、おつり！」

「降りたいの？はい」

と、美優を降ろした瞬間、後悔した。

けど、時既に遅し。

美優はすごいスピードでその広間を走り出した。

「み、美優！ダメよ！止まりなさい！」

「キヤハハハハー！！！」

確かにこの広い畳の間は、子供には魅力的だろう。

走り回りたい気持ちはわかる。

でも！！！！

場所が悪すぎる！！！！

統矢は美優に会ったことがない。

初対面がこれじゃあ、

統矢の娘としても、幸太の娘としても、

なんだか申し訳なさ過ぎる！

「美優！！！！いい加減にしなさい！！！！ママ、怒るわよ！！！！」

「ヤダー！」

「ヤダじゃない！！！！」

1歳半とはいえ、子供の全力疾走はかなり速い。

私も本気になって追いかけるけど、ストッキングにスカートでは大したスピードも出ない。

「みゆ・・・！」

「何をしてる？」

「・・・統矢！」

いつの間にか統矢が部屋の中に入ってきていた。

第24話

「ご、ごめんなさい。子供が・・・ちょっと、美優！！止まりなさいってば」

焦った私はかなり大声で怒鳴りながら美優を追いかけた。

「ワイー!!」

「待ちなさい!!!」

統矢はポカンとして、しばらく私と美優の追いかけてっことを眺めていた・・・

美優を捕獲した時は、私は髪もボサボサでゲッソリしていた。

「・・・ごめんなさい」

「ああ、構わない。元気な子供だな」

「・・・」

申し訳なくって言葉も出ない。

「あの。少し二人で話したいんだけど」

「わかった。おい、お前ら下がってけ」

統矢はそう言って、襖の近くに立っていた3人の付き人を廊下へ出した。

彼らが襖を開けたとき、廊下に見知った顔があった。

「あ！」

「あれ？愛さんじゃないですか」

それは幸太がたまに連れてくるヤクザ友達だった。

よく美優とも遊んでくれる人だ。

助かった！

「ごめんなさい。悪いんだけど少しでも美優を見てもらえないかしら？」

「お安い御用ですよ。美優ちゃん、おいで。お外で遊ぼう」

「お外」と聞いて美優の目が輝いた。

あつと言つ間に私の手を逃れ、廊下へ走っていつてしまった。

「はあ」

「ははは、すっかり母親が板についてるな」

「ええ・・・もう、大変よ」

「みたいだな」

こんなボロボロになりながらするような話じゃないのに・・・

私はため息をついて、鞆を開いた。

「これ。統矢に渡そうと思って。幸太には内緒よ」

「なんだ？」

「住所。そこにユウさんと蓮君が住んでるわ」

「！」

統矢の顔が固まった。

「私でも簡単に見つけられたんだから、廣野組の力を持てれば

すぐに見つかるでしょうけど・・・

探したいけど探してないんでしょ？」

「・・・どうしてそう思う」

「わかるわよ、統矢のことならなんでも」

「・・・」

10年間も見てきたのだ、統矢の考えていることなんて、手に取るようにわかる。

連れ戻すつもりがあるかどうかは別として、統矢はユウさんの居場所くらいは知りたいはずだ。

でも、自分の浮気のせいで出て行った妻を「探せ」とは組長として自分に命令できないだろう。

統矢の性格ならなおさらだ。

「連れ戻せって言ってるんじゃないわ。ユウさんも蓮君も今とても幸せに暮らしてる。

結婚したわけじゃないけどね。ただ、そこに居るってことだけ統矢に知っていてほしいの」

「・・・二人に会ったのか？」

「ユウさんには会ってないわ。でも・・・」

私はもう一度鞆を開き、ソレを統矢に渡した。

統矢が目を見開き、食い入るようにそれを見つめる。

蓮君とサナちゃん、そして美優の3人が写った写真だ。

山尾家を失礼する前に撮り、山尾さんがその場でプリントアウトしてくれた。

「蓮君には会ったわ。とっても元気だった」

「・・・そうか」

統矢はいつまでもその写真を見つめていた。

タクシーから夕日が見える。

綺麗だ・・・

美優はまた私の腕の中でグスリと眠ってしまった。

こんなにお昼寝ばかりしてたんじゃ、夜はなかなか寝ないだろうな。

流れる景色をぼんやりと見ながら、廣野家のあの長い廊下を思い出す。

延々とどこまでも続くような廊下。

あのお屋敷の広さを象徴しているようだった。

統矢はあの広い広いお屋敷にたった一人で居る。

子分はもちろんたくさんいる。

でも・・・

統矢に渡した写真の中には統矢の子供が二人も写っている。

だけど二人とも統矢の側にはいない。

ユウさんもない。

統矢は一人きりなのだ。

幸太が、

「ネエちゃんはいつも俺に、『ユウちゃんは頑張っていていつか統矢さんの役に立ってね』って言ってた」と言っていた。

私は、ユウさんが幸太のことを心配してそう言っているのだと思っていた。

確かにそういう気持ちもあっただろう。

でも、おそらくユウさんの本心はその言葉通りなのだ。

『統矢さんの役に立ってね』

ユウさんはいつでも統矢のことを想っていた。

自分が統矢と私のせいで苦しい立場にある時も、統矢ことを心配していた。

だから、幸太に統矢を助けてほしいと言ったのだろう。

私にも・・・

私にも何かできるだろうか？

幸太が統矢のために働けるようになったとき、私にもその手助けができるだろうか・・・？

「あれ？電気がついてる」

家のドアを開けて驚いた。

私、電気をつけたまま出掛けちゃってたのかな？

「愛ー、遅い！どこ行ってたの？腹減ったー！」

「幸太？どうして居るの？遅くなるんじゃないかったの？」

「愛と美優に会いたくて早く帰ってきた」

「嘘ばかり。道が空いてただけでしょ」

「・・・それもある」

「連れ込み旅館はどうだった？」

「おー。よかったよ！って、だからそんな旅館じゃないって！普通の旅館！」

どうだか。

「美優、ママとどこ行ってたんだ？ママの浮気に付き合わされてたのか？」

「ちんかんちえん」

「ちんかんちえん？新幹線か？」

「ふじちゃん」

「ふじちゃん？・・・富士山か？」

「うん」

幸太がジロリと私を見る。

うわー！美優！！なんてことを！！！！

「愛・・・」

「み、美優ったら何訳のわからないこと言ってるのかしらね！ほら、二人とも！

早くお風呂入っちゃって！私は夕ご飯の準備するから！」

二人をお風呂へ追いやって、ため息をつく。

子供って無邪気すぎて怖い・・・

見てないようで何でも見てる。

そういえば、お隣の奥さんが、

「子供が幼稚園でオママゴトしてたんだけど、私と夫の夫婦喧嘩を見事に再現してて焦ったわー」

って言ってたっけ・・・

気をつけなきゃ。

「夕飯なに？」

「幸太の大好きな焼肉よ」

「おお！やった！……って、家で焼肉って、すげー手抜きなんじゃない？」

バレたか。

「……今日ってやっぱり一日中、出かけてた？まさか本当に浮気してたとか？」

「な、何バカなこと言ってるのよ！私がそんなことする訳ないでしょ！？」

「してたくせに」

うつ。

「幸太こそ！連れ込み旅館に行つてたくせに！」

「だからそんなトコじゃないって言ってるだろ！？」

「ちゅれこみりよかんー！」

美優！それはオママゴトにはちよつとハード過ぎるわよ！

「お。美優、難しい言葉、言えるんだな。でも『ちゅれこみ』じゃないぞ、『つれこみ』だ」

「ちゅれこみ」

「つ・れ・こ・み」

「ちゅ・れ・こ・み」

「つー！」

「ちゅ！」

「っ！だつて」

「っ！」

「おお！言えた！偉いぞー、美優！」

「ちよつと、幸太！！！！！」

あはは、と幸太が笑う。

なんでもない普通の食卓。

どこにでもある光景。

でも、こんなふとした瞬間に眩暈がしそうなくらい幸せを感じる時がある。

私が統矢のために直接できることは、今となつては何もない。

統矢自身の幸せは、統矢が自分で手に入れるしかない。

ユウさんと蓮君がそうしたように。

そして私が、幸太の助けを借りてそうしたように。

統矢はユウさんと蓮君を連れ戻すだろうか？

それとも連れ戻さないだろうか？

私にはわからない。

どちらが統矢にとって幸せなこともわからない。

でも、私はこれからも統矢を見守って行きたい。

統矢が幸せになるのを、ここで、幸太の横で見守って行きたい。それが、私が統矢にできる唯一のことだ。

うっん、もう一つあった。

私が続矢のために、そしてユウさんのためにできること。

それは、私自身が幸せであり続けること。

それが、私の罪滅ぼしだ。

第24話（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

これedyouやく本編の「18 years」を再開できます！

明日から早速更新を始めますので、よろしければそちらもご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3775i/>

SECOND LOVE

2010年10月11日20時48分発行